

---

# 独立アイドル艦隊奮闘記

八幡P

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

独立アイドル艦隊奮闘記

### 【NZコード】

NZ8574P

### 【作者名】

八幡P

### 【あらすじ】

伊豆半島は下田を母港とする、実験艦や捕獲艦等、規格外の艦艇と一線級士官、女子兵、女性士官等の色物で編成された独立特務実験艦隊。通称「独立アイドル艦隊」

その噂の艦隊に、開戦迫る11月、一人の参謀長が配属された時から物語は始まる。

独立アイドル艦隊出撃せよ！

## プロローグ 決戦の海へ（前書き）

- ・「この小説はアイドルマスターを原作とする架空戦記です
- ・「この意見」「感想」「要望につきましてはお気軽に、かつ紳士的にどうぞ
- ・なお、特定キャラに対するお約束米の使用は節度を持って、ファンの逆鱗に触れないよう注意ください

・この作品はフィクションです。実際の国家、団体、人物とはあまり関係ありません

・何名かキャラが崩壊しています。許せない方は回避してください

スペシャルサンクス

山口多聞先生（P）

and YOU！

それでは、激動の三年間、戦場の海を駆け回った少女たちの記録を、どうぞご覧ください。

## プロローグ 決戦の海へ

昭和19年10月 艦隊泊地

プロデューサー

艦橋から外を見やると、戦艦や空母、巡洋艦に駆逐艦がずらりと並んでいるのが見えた。この内何隻が生きて日本まで帰りつくことができるのだろうか。

何せ、敵味方あわせて、それぞれ20隻もの戦艦と空母が激突する、この戦争最大にして最後の一大艦隊決戦が始まろうとしているのだ。少々感傷的になるのも無理はあるまい。

と、一人頷いていると、誰かが後ろから歩いてきた。この声はあいつかと思いながら振り向く。

「プロデューサー、やはりここでしたか」

思った通りの人物がそこにいた。

始めはプロデューサーと呼ばれてもピンと来なかつたが、もう慣れだ。そういえば彼女も、最初からすれば随分変わったものだと思う。変わらない所もあるが。

「少々、ご相談したいことがあるので、今よろしいですか？」

「ん、わかった」

とりあえず了承の返事を返し、また外を眺める。

「会議室で待っていますね、プロデューサー。早く来てください……  
ね」

彼女が去つて行く足音を聞きながらまた思いに耽る。

思い返せば、俺がこの艦隊に着任してからもう3年もたつのだ。  
あの時は、まさかこんなことになるとは思わなかつたのだが。

俺がこの艦隊に参謀長として着任したのは、開戦迫る昭和16年、  
晩秋のころだつた……

## 第1話 始まり

昭和12年7月、盧溝橋での衝突に端を発した支那事変は、当初1ヶ月で片がつくとされた。しかし国民党は予想外の抵抗を見せ、戦闘は長期化した。

それに対し日本軍は、米英からの援蒋ルートの遮断をもつて対抗、沿岸部と長江・黃河流域を抑え、昭和15年にはフランス政府との協定により北部仏印（現ベトナム）に、翌16年には南部に進駐した。

それに対し英米蘭の三ヶ国は石油禁輸及び通称条約の破棄で応じ、太平洋の緊張は嫌が応にも高まつた。

昭和16年11月2日  
伊豆 下田

ここに母港をおく独立特務実験艦隊。

元々は新兵器、鹹獲艦のテストを任務としていたが、軍縮期には条约逃れの隠れ蓑としても利用されてきた。

しかし、この艦隊の特徴は実験艦がてんこ盛りなことでも、明らかに日本艦で無いフネが所属していることでも無い。

その証拠に、海軍内でも滅多にこの艦隊を正式名称で呼ばないのだ。

そんな実験艦隊に一人の少将が配属された。

まだ少将としては若い。

（……ここが、俺が参謀長になることになる独立アイドル艦隊司令部か……）

そつ、この艦隊は、その異名が示す通り、海軍兵学校女子部を卒業した女子兵や女性士官の殆ど唯一の配属先なのだ。

ただ、男にとっては完全に左遷先であるのだが。女の子いっぽいでも誰も行きたがらない、というのがそれを裏付けているだろ。口の悪い者などは、『アイドル』<sup>アイドル</sup>艦隊ではなく『アイドリ』（役に立たない）『艦隊だ、などと言つて』もある、と言えば海軍内での地位もわかるというものだ。

#### アイドル艦隊 艦隊司令部

約束の場所にたたずむ先ほどの男。

そこに、勝手知つたる様子でもう一人、少将が歩いて来て声をかけた。

「やあ、聞いたよ君。いろいろやらかしたらしいね？」

「お久しぶりです武田先輩。いやはや、面目ない」

この人は武田蒼一少将。アイドル艦隊の前参謀長だ。この人も若じ頃はやんちゃしたらしく、それで左遷されて來た。

「ところで、武田先輩だけしかいないのでですか？ 他の……高木司令は？」

「ああ、口程の手違いでね、先に演習に出てしまつたんだ。迎えを寄越すと言つていたがね」

そのとき、爆音と共に1機の単発機が近くの小さな飛行場に降りて

きた。

「来たようだね。いいかい、この部隊の艦には確かに癖がある。だが、その癖さえ飲み込めば素晴らしい艦性能を発揮する。よつはどう艦や乗員の特性を見抜くかだ。そのためにこれを用意した。存分に役立ててくれ」

そう言つて無地のファイルを差し出す。

「兵器のスペックや指揮官のプロフィールなんかを纏めておいた。わからないうじがあつたらいつちやんや高木司令に聞くと良い」

「あつがとうござります」

礼を言つて受け取り、とりあえず小脇に挟んで飛行場へ歩き出す。後で飛行機の中で読もう。

「礼には及ばん。頑張れよ、『プロテクーサー』」

プロテクーサー、この艦隊ができたころから何故か、参謀長はそう呼ばれるのが慣例なのだ。

「それと一つ、打撃艦『由布』は男子禁制だからな。前に女顔の奴が迷いこんで……」

「どうなったんですね?」

「……『彼女がおおおおおん』で『りゅんりゅん』と……」

(なにそれ怖い)

「まあ、みんな良い……楽しい娘たちばかりだよ。掛け値無しに。  
お、着いた着いた」

先程の飛行機……、パツと見零戦に見える複座……座席が二つ……  
の飛行機がタキシングしていた。

「彼女は星井美希、中佐で航空参謀をやつていの」

操縦席の風防が開いて、降りて来た操縦士が飛行帽を脱ぐと、下から腰まで伸ばした見事な金髪が現れた。

別に、黒髪でない日本人がいない訳ではない。  
なぜなら、ロシア革命の影響でそれなりの数、ロマノフ王朝のやん  
ごとなき方々が極秘裏に日本に逃れ、日本名を名乗り生活している  
ことは公然の秘密だからだ。

他にも、例えば伏見宮元帥の秘蔵つ娘などは、体质の関係で銀髪な  
ので『銀色の皇女』などと呼ばれている。

それでも黒髪でないのは珍しい。

「星井美希、ただいまお迎えにあがりました、なの」

ピッ、と敬礼する。

（確かに楽しい、楽しくて仕方ないな……）

敬礼を返しながら、えらいところに来たもんだと思つプロトユース  
ーであつた。

נָאָם

## 第1話 始まり（後書き）

### 登場人物紹介

武田蒼一 少将

前アイドル艦隊参謀長

プロデューサーの先輩にあたる。  
優秀だが性格が災いして飛ばされた。

P 少将

アイドル艦隊参謀長

プロデューサー。本名は不明。

## 第2話 艦隊旗艦『陸奥』

11月2日 昼頃

伊豆諸島 ハ丈島上空 高度3500m

### プロデューサー

エンジン音も快調に、美希が操縦桿を握る零戦の複座仕様型が飛ぶ。しかしあつときはひどい目に遭つた。

「特殊飛行とか体験したい？」

という問いを、猫のようないたずらっぽい笑みを浮かべて投げ掛けられた時点で気付くべきだつたのだろうか。

気軽に了承した瞬間、垂直旋回に始まり、3連続宙返り、1000m急降下に急上昇 Gはだいたい4Gくらいかかる 、そして急横転を2、3回。

危つゝ意識がアイキヤンフライする所だつた。

「プロデューサー大丈夫？ ちょっとやけに過ぎたの」若干心配そうに尋ねてくる。

自覚はあつたのね。

「まあ、な。……そろそろハ丈島か？」

「うん。後30分もすれば第1分艦隊の母艦が見えるの。といひでプロデューサー、おにぎり食べる？」

……航空糧食は巻き鮓だと聞いたんだが……もしかして。

「いや、いい。好きなんだろ？　おにぎり」

「そーなの。一日一個食べないと体調おかしくなるの」

中毒かよ！？

## グッシュコミュニケーション

それから、毎晩の星についてなど、面白い話をしてくれた。  
視力2・5超のさぶちゃんは見えるの、だそつだ。  
なかなか良い娘じゃないか、美希は。

さて、第1分艦隊ってなんだろ？  
という訳で、わざと貰ったファイルの最新の艦隊編成のページを見る。

独立特務実験艦隊 艦隊編成

昭和16年9月1日時点

独立特務実験艦隊

司令長官 高木順一朗中将

第1分艦隊 直率

・ 独立航空戦隊 日高舞大佐  
旗艦 空母『陸奥』直率

・独立防空戦隊 如月千早大佐

旗艦 軽巡『梓』直率

第3駆逐戦隊 『第101号』『第102号』『第103号』『第1

04号』

第2分艦隊 音無小鳥少将

・独立打撃戦隊 直率

旗艦 打撃艦『多良』菊地真大佐

打撃艦『由布』萩原雪歩大佐

・独立水雷戦隊 我那霸響大佐

旗艦 軽巡『夕張』直率

第1駆逐戦隊 『初靄』『朝靄』『夕靄』『薄靄』

第2駆逐戦隊 『令月』『嘉月』『雨月』『桂月』

第3分艦隊 石川実少将

・独立仮装巡洋艦戦隊 直率

旗艦 仮巡『愛国丸』直率

仮巡『報国丸』尾崎玲子大佐 仮巡『護国丸』岡本まなみ大佐

・独立潜水戦隊 直率

潜水艦『第78号』日高愛大尉 潜水艦『伊200』水谷繪理少佐

なるほど、空母戦隊か。

しかしながら、軽巡『夕張』が嬉しくなるほど見慣れない艦ばかりだな。

砲術学校教官時代の助教の口癖を借りるなら「面妖な！」ってとか。

そういえば、武田先輩は「女の子ばっかり」と言ってたが、何人か男の名前……両方あり得る名前もあるか。見知った名前もちらほら。

らうこるし。

「あ、見えてきたの！　1時方向！」

まだ点にしか見えないが、海の上で目標を探す時はわざと少しすらして、左右どちらかだけ見れば良いようにするといつのは本当らしい。

と、見る間に水平線からフラットな艦影が湧き出ってきた。さつきの点は外縁の駆逐艦らしい。

あれが……『陸奥』か……。

独立特務実験艦隊旗艦『陸奥』、その波乱に満ちた生涯の始まりは大正7年、1918年にまで遡る。

大正7年6月1日、横須賀海軍工廠にて、長門級戦艦の一一番艦として起工された。

しかし、大正10年に開催されたワシントン軍縮会議が彼女の運命を大きく変えることとなつた。

会議で決定された「未成艦を全廃棄する」という条項、そのリストに『陸奥』も含まれていたのだ。

当然、海軍内部では戦艦として竣工させるべきだ、という意見が主流だった。まだ世界に一隻しかない16インチ級戦艦（当時は日本の『長門』とアメリカの『メリーランド』のみ、イギリスは起工すらしていない）であつたし、ほぼ完成していることから、どうにか誤魔化せるというものだった。

しかし、次の一句が場の空気を一変させた。

「今なら1対1対0だけど、『陸奥』認めさせたら2対3対2にな

らない？」

確かにその通りなのだ。もし、未完成艦リストの『陸奥』を復活させると、当然、アメリカの未完成16インチ戦艦、コロラド級一番艦『コロラド』と、三番艦『ワシントン』を復活させるだらうし、そうなれば無駄にプライドの高いイギリスのこと、ウチも一隻ぐらい持たせろ、と言い出すに決まっている。

それを受け、日本は本会議で、『陸奥』は完成艦であるが世界平和と各国友好のために廃棄すると表明、歓呼を持つて迎えられた。そして、予想通りイギリスが駄々をこねて一隻の新造を認められ、代償に日本とアメリカは一隻づつ、主砲と装甲を全撤去しての保有が認められた。

かくして、各国は長い海軍休日に突入、『長門』『メリーランド』『ネルソン』はビッグ3として君臨し、『陸奥』の主砲と装甲は大事に保管され、船体は実験艦として実験艦隊に送られ、様々な改造を受けることとなつた。

『陸奥』の改装・改造は多岐に渡り、艦尾の延長に始まり、新型機関の試験、球状艦首の実験、新型艦橋の実装等々、手を入れなかつたところは無いという程であつた。

そして、昭和10年、一人の少佐（当時）の転倒に端を発した騒動により、艦橋・煙突が倒壊するという事故が発生、既に条約の期限が切れようとしていたこともあり、新造した方が良いとされ、海軍はそのまま『陸奥』を廃棄処分にしようとした。

しかし、それに対して、空母に改装すべきだ、とする某中佐（当時）の意見を容れた実験艦隊司令長官の具申が何故か採用され、紆余曲折の末、民間最大手の『大亜細亜造船』にて空母に改装され、また島型艦橋の試験や艦橋一体型煙突の実験、解放式格納庫・電探・射出機の試作品の設置等、またしてもこき使われつつ今に至るのである。

「ん？ あの『陸奥』の横の巡洋艦は？」

空母の横の日本らしくない巡洋艦を指す。

「あれは元フランス艦の軽巡『梓』なの。ちょっとややこしい艦名なの」

ああ、ヴィシー政府から買つたやつか。多分、長野の梓川が命名元だが、女の子の名前みたいだな。どれ、スペックは……

「……排水量7291t、速力32kn、15・5cm砲連装4基、高角砲8基、魚雷12門に偵察機2……優秀じやないか。装甲は薄いが」

「艦長もそんな感じなの。尊敬してる人なんだけど……」

「けど？」

「一言四には空母、空母って言いくて言いくて空母厨なの」

「……」

「だから氣をつけるの」

艦隊上空を、味方識別のバンクを振りながら通過する。

俺の目は飛行甲板に釘付けになつた。

「なんじゅありゅあーーー！」

なんと、空母の甲板いっぱいに2人の女の子……美希と知らないリボンの女の子……の笑顔が描かれていたのだ。

「あれは乗員の公募で決まった特殊迷彩なの。最後までミキか春香かで揉めたから、不本意だけどツーショットなの」

そう言いながら操縦桿を倒し、空母への最終アプローチに入る。なんで止めなかつた高木長官！？  
飛行甲板のなんと痛い……小さいことか。

「今から『制御された墜落』をお見せするね、しっかり掘まつてて！」

「え、つ！？」

そのまま、2人の顔の間のワイヤーにフックを引っかけ、リボン付きの顔あたりに叩きつけるように着艦した。

駆け寄ってきた甲板員に手伝つてもらいながら甲板に降りる……目え踏んづけた……。

艦橋に2人で移動すると舞さんが出迎えてくれた。

「久しぶりね、元気にしてた？」

「ええ、そちらも相変わらずですね」

この人は、元同僚の友人で何回も飲んだことがあるが……破天荒な人で、若干苦手だ。

「これからよろしく頼むわね、プロテゴーサー君。もしこの『陸奥』や娘に何かあつたら許さないからね?」

「無論です。……と恐れ入高木長官は?」

「高木司令長官や一分艦戦隊司令、参謀たちはもうアリの會議室に集まつてゐるから、案内するわ。つこつきて」

次は直属の上司と部下に対面か……

つづく

## 第2話 艦隊旗艦『陸奥』（後書き）

まさかの痛空母『陸奥』

ちなみに、空母の甲板は、それこそ猫の額ほど……飛行場の1割ほどの広さしかなく、そこに張った数本のワイヤーにフックを引っかけなくてはならないのです。

なので、空母への着艦は『コントロールド クラッシュ』（制御された墜落）』と言います。

何か意味がわからない単語があつたら言って頂ければ対応します。

『大亞細亞造船』は、義勇艦隊奮戦録よりお借りしました。  
快く使用許可を下さった山口多聞先生に格別の感謝を。

『意見』感想お待ちしております

### 第3話 頬合わせ その1

空母『陸奥』 大会議室

プロジェクトナー

「……以上より、軽巡『梓』及び『101』級駆逐艦の対空射撃は非常に有効であり、88mm砲の高性能も相まって高い戦果を挙げ得ると評価できます」

「なるほど、よくわかった」

「以上で防空戦隊よりの報告を終わります」

痩身で鳥羽色の髪の大佐が無表情で着席した。  
確かに88mm砲は、陸海軍が共同でドイツから購入した高射砲のライセンス生産版だったな。  
正直、財閥が間を取り持つていなければ陸海軍の装備共用など不可能だったのではないだろうか？

「うむ、少々順番が前後したが、本日、武田君に代わって新しいプロジェクトナーが来てくれた。さあ、君、こっちへ来たまえ」

「ね、もう話終わってたのか。  
ともあれ、席をたつて高木長官のもとに歩く。

「よく来たね。道中はなかなか刺激的だつたろう？ 実は私も間違つて美希君のおにぎりを食べてしまったことがあってね……」

そつと笑つて苦笑する。

あいつ、高木教官……じゃなくて司令長官にまであれやつたのか…

…何と奔放な。

「さて、まあよろしく頼むよプロデューサー。ウチの参謀長業務はきついぞ。何せ、参謀はそこの4人しかいないからな」

「…………はあ？」

確かに、おかしいとは思つっていたのだ。

この部屋にいるのは8人。

まず、高木長官、俺（参謀長）。そして舞大佐（航空戦隊司令官兼『陸奥』艦長）と先ほど発言していた胸が飛行甲板な大佐（防空戦隊司令官）。

残りは、『陸奥』の甲板に描いてあつたリボン、鳥羽色の髪は同じだが胸は超警級な中佐、金髪アホ毛の美希、メガネでエビお下げ多分彼女がりつちゃんの4人。

…………連合艦隊だと20人からの幕僚がいるもんだが……。4人か……少ないだろ。

「まあ、各々、しばらく自己紹介でもして親睦を深めるよ！」

言つだけ言つて隅っこに引つ込んで茶をすすりだした。

まず、参謀ズの中でも上座に座つていたリボンが立ち上がつた。

「私は天海春香、首席参謀で戦務と政務もやつてます。その、私とつてもおつちよこちよいんですけど、精一杯がんばります！！」

頼むからおつちよこちよいで事故起こすなよ？

で、次はほわつとした雰囲気の人が立つ。おお、揺れた……アホ毛が。

「三浦あずさと申します、航海参謀やつてます。よく方向音痴と言われますが、全然そんなことありません。よろしくお願ひいたします～」

絶対ミスキャストだわこれ。

次、次行こう。

「ミキの名前は星井美希。航空参謀で飛行隊長なの。よろしくね  
くそ、かわいいじやないかおにぎり星人……。  
で、仮称りつちゃんな訳だが……スタイル良いな、案外。

「私の名前は秋月律子、その他の幕僚全職兼任。目指すは完全勝利、  
全力でサポート致します！」

心強い限りだが……ちょっと待てよ。

「……サポートしてくれるのは有難いんだが、幕僚全職兼任とはどうこうことだ？」

「それについては私が答えよう」

横から高木長官が口を挟む。

「我が艦隊は慢性的な人材不足でね、それが特に顕著なのが佐官クラスと潜水艦隊なのだよ。佐官不足は兼任させて実務は部下に任せれば良いが、潜水艦隊の定員割れは、伊7・伊8を維持しきれなく

なるほどでね……伊7の乗員をまわしてきたり、伊8で人材を育成したりしているが、定員を満たすのがやつとなのだよ」

なるほど、佐官は少ないが艦長を削る訳にもゆかず、兼任しまくりか……。それだと潜水艦長なんか貴重だな……それで大尉がいたのか。

見ると、秋月中佐が唇を噛んでいた。そういうえば、秋月中佐の専門はなんなんだ？

「あー、秋月中佐？」

「律子で構いませんよ」

「じゃあ律子。律子の専門はなんなんだ？」

「作戦参謀です」

適役だな、なんとなく。

「では私は長官室に引っ込んでいるから、適当に話が済んだり、後で部屋に来るよう」。話がある

高木長官が会議室から出て行く。

「さて、私のことばっく君良く知ってるでしょ。あとばっく……？」

「千早ちやんまだじやない？ 自己紹介。ほり早くー。」

リボンの首席参謀がわつきの痩身の大佐を急かす。

「…………ちやん付けで呼ばないでくれる?」

「えー、いいじゃない。千早ちゃんと私は同期なんだしー」

「…………はあ…………。名前は如月千早です。防空戦隊司令官を務めています。以後、お見知り置きを」

「こいつがか……。確か空母厨だったな……。

その後、しばらく歓談タイムに入つた……

一段落したころ、話の輪に1人入つて来なかつた千早が気になつたので、情報収集してみるとこととした。

「なあ美希、ちょっと来ててくれ」

「何?」

美希を呼んで声をひそめて尋ねる。

(なあ美希、如月千早について教えてくれ。いつもあんな感じのか?)

(こつもよりっぽーつとしてるかも……。でも、だいたい同僚クラスにはあんな感じなの。例外は航空関係の人だけなの。プロデューサーは?)

(俺は砲術屋だからな……)

(やつぱつ……。前の、武田Pも苦労してたの。相手が航空戦につ

いて理解が無いと見るや講釈垂れ出すから『氣をつけて。あ、来たの。ぐっじりじくんなの』

顔をあげると、話の輪から外れていた千早が歩いて來た。

「プロジェクトコーラー、今ちょっとよろしくですか?」

「来たぞ……。」うなつたら己の舌先三寸だけが頬りだ……。

「ああ。なんだい?」

「プロジェクトコーラーは、航空機とは、航空戦とは、どんなものだと考  
えておられますか?」

ド直球ストレートキターーーー!

「うん、そうだね……」

ヤバい、ヤバいぞ!これは……

……そうだ、空母指揮官や航空派の提督なりじつひだりつか?

## 選択肢

1、南雲忠一 中将

「航空戦のことには自信が無いからな。わかる奴に任せよう

2、小沢治三郎 中将

「飛行機は弾丸と考えていい」

3、山口多聞 少将

「それよつお前、ちゃんと飯食ってるのか?  
いか」

胸板全然無いじゃな

どいつもく、俺!?

つづく

### 第3話 顔合わせ その1（後書き）

『この小説はフィクションです。実際の小説家になろうの作者さんは関係ありません』

美希「す、ぐ……白々しいの……」

作者「一応、問題無いように連絡つけたから大丈夫」

P「で、この選択肢はどうなるんだ？」

作者「パーフェクト、ノーマル、バッドが一つづつ。バッドは千早がマジで激昂する。よく読めば根拠をもつて決められるハズ」

美希「じゃあ公募するの？」

作者「いや、今回はしない。ただ、予想は自由だし、需要があるならボトルートも別伝で公開しようかと。如何でしょうか？」

美希「それでは、山口多聞先生の『裏独立アイドル艦隊奮戦記』もよろしくなの~」

作者「山口先生による支援小説です。私、八幡と山口多聞先生の間で交わされたメッセージを収録しています。正直、痛いですがよろしければどうぞ」

ご意見、ご感想お待ちしております

## 第4話 答え（前書き）

「やつはいりへなつた。」

## 第4話 答え

「プロテューサーは、航空機とは、航空戦とは、どんなものだと考  
えておられますか？」

「うん、 わうだね……」

ヤバい、 ヤバいぞ」これは……

選択肢

1、 南雲忠一 中将

「航空戦のことは自信が無いからな。わかる奴に任せると

2、 小沢治三郎 中将

「飛行機は弾丸と考えている」

3、 山口多聞 少将

「それよりお前、ちゃんと飯食つてるのか？ 胸板全然無いじゃな  
いか」

どりする、俺！？」

よし、決めた。

「それよりお前、ちゃんと飯食つてるのか？ 胸板全然無いじゃな  
いか」

「……なつ

」

場の空気が凍り付くのがわかる。  
ちらつと美希を見ると、食べ掛けのおにぎりを取り落としそうにな  
つて、なんどよりによつてそれ言うの？ といつ顔をしている。  
仕方ないじやないか。航空派の提督でまづ出てきたんだから。それ  
に、兵学校時代に食と健康が云々とか……。  
ええい、ままよ。

「いいか、俺たちはだな 」

ふらつ。

まさに、一の句を継ぐとした瞬間、千早の目が左右別々の方を向  
き、そのまま糸が切れたように崩れ落ちた。

「大丈夫かっ！？」

とつたに抱き寄せて額に手をあてる。

「！？ す、い熱じやないか！ おい美希！ 医務室は何処だ！」

「なつ、ちはつ……あ、案内するのー。」

舞さんが開けたドアから金色の閃光が廊下に飛び出して行く。  
俺は千早を背負つて こいつ、長身の割りに恐ろしく軽い。それ  
に骨っぽい いまだに呆気にとらわれている参考ズを置いて、美希  
を追つて走り出した。

如月千早

「それよつお前、ちゃんと飯食つてゐるのか？」

「……なつ

」

何故わかつたんだろう？ 何日か体調が悪くて朝から何も体が受け付けてくれなかつたのを……

あ……なんか急に気が遠くなつてきた……身体に力がはいらない……

「 × 、

……

ふり

あ……たおれる……

「 ×かつー！？」

そのままあれよあれよとこつまほおんぶされた  
おおきな……せなかだな……

私の意識は、そこで途切れた。

如月千早

翌朝  
医務室 ベッドの上

丸い舷窓から朝日が射し込んでいる。

「…………？」

白い天井で……冷ッ、氷嚢が額に乗っている。

「お、気がついたか？」

横を向くと、座つて何かを読んでいたプロデューサーがこちらを見ていた。  
それは？

「ああ、これが？ 昨日聞いたアイドル艦隊の保有兵器の要目だ……それより、だ」

急に真剣な表情になつて言つ。

「貴様、40度も熱があつたそうじゃないか。俺たちは指揮官なんだ。部下の命を、国家の命運を背負つているんだぞ。その指揮官がそんなフラフラでどうするかー 気負うのはわかるが体調崩したらきちんと休め」

…………その通りだ。昔、師匠にも同じようなことを言われたのに

「…………はい……」

## プロジェクトコーナー

「 どなにするか！ 気負うのはわかるが体調崩したらきみひと休め」

「 .....はい.....」

うん、少し厳しい言い方かも知れんが、何かあつてからでは遅いからな。

「軍医長の見立てでは3日は安静だそつだ。しっかり養生せい」

「わかりました」

あとは..... そうだ。

「防空戦隊だがな、三浦中佐が臨時で指揮するそつだ。あくまでも臨時だからしつかり体調整えて戻つてこい」

「あずささんがですか.....」

と、一瞬で悪戯心が頭をもたげてくる。悪い癖だ。

「ああ、あずささんが『梓』の指揮をとる」

「 .....」

下をむかれてしまった。

「『アズ』の指揮をあずかんがとるんだ」

」  
「  
」  
「

千早の手が毛布を関節が白くなるほどしづく握っている。

「指揮はあず……」

「へへへ…… もうだぬ…… あははははははは、あははははは

L

やばい、ツボにクリティカルヒットしたらしい。

「ははは、げほつげほつじほつ」

「ちよつ、軍医長、軍医長——。」

その後、飛んできた軍医長殿に、「病人を笑い死にさせる気ですか！」と、きついお叱りをうけた。

## パークエクトコミュニケーション?

七八

## 第4話 答え（後書き）

作者「正解は  
小沢ルート バッド  
南雲ルート ノーマル  
山口ルート パーフェクト  
でした」

美希「夕食の味噌汁を吹いた人がいないか心配なの」

作者「大丈夫だろ……」

響「自分たちの出番はまだか？」

作者「もううちよつとだから……」

美希「この分だと開戦前に10話はいくの……」

「ご意見ご感想お待ちしております

## 第5話 3年の意味

空母『陸奥』 会議室

「ふむ……。如月君には少々無理をさせていたようだね……」

「ええ、元々無理しそうなきらいがあったとはいえ、40度とは……気づいてあげられなかつたのが悔やまれますわ……」

騒ぎを聞きつけて戻ってきた高木長富と口高舞が頭を抱える。

「でも～、さつきのプロデューサーかつこよかつたです～。やつと運命の人に出会えたかも～」

「えー、あずささん、いい歳して運命の人つてのはちょっと……」

「春香、ほつとつてあげなさい。でもまあ、身のこなしさ素早かつたわね。プロデューサー」

2人が頭を抱える横で、参謀の3人は直属の上司の話題で盛り上がつていた。

「ときに司令、プロデューサーの他にもう一人誰か着任するのでは？」

「そうだそうだ。律子君、たしか優秀な情報幕僚が欲しいと言つていただろう。一人ティンときた人材がいたからスカウトしてきたの

だよ。たしか今日着くはずだが……」

皆の視線がなんとなく閉じきつていないドアにむかう。

「失礼します。高木司令はここだと伺つたのですが」

「おお、来たか。入りなさい」

半開きのドアをあけて、30代半ばぐらいだろうか、大尉の階級章をつけた丸眼鏡の男が入ってきて敬礼する。

「失礼します。本日付で、独立特務艦隊司令部付き従官となります、志摩大尉であります。着任の挨拶に参りました」

「ちょうど入れ違いだな。すまない、今さつきまで全員居たのだがね」

高木長官の答礼にあわせて手を下げつつ、志摩がちらりと下を見た。

「おや？」

床からなにやら書類を拾いあげる。

「どう？ あなたの評価が聞きたいわ」

律子が、先ほど千早が落とした報告書の資料を拾いあげた志摩に問い合わせる。

そうですね……、と書面を睨んでいた志摩が顔をあげる。

「距離が足りなく思います」

「距離？」

はい、と頷き続ける。

「88ミリは従来の127ミリや新式の100ミリの砲より射程があつません。ですので、どうしても防空陣形を小さく作る必要が発生します」

「あら～？」

あずささんが笑顔のまま首を傾げる。

「ちょっとこれは大変かもしだせませんね？」

「ええ、IJの陸奥に近づきて、下手に運動が出来ないんです」

「だから、小さくまとめた艦隊回避運動をとらざるをえないし、下手をしたら衝突事故を起こしかねない。ですか～？」

あずささんが航海参謀らしい懸念を表す。

「それから、口径の小さなのは危害半径を狭めます。それを補うための弾の消費が怖いですね……正直、理想倒れ感が……」

律子が下を向いてふるふる震えている。  
少々怪訝な顔をしつつ、志摩が続ける。

「小さくて取り回しが利くのが必ずしも最適解ではあります。なるべく大きく、バランス良く、かつリーズナブルでも良いのでは？」

「もうだめ、耐えらんない！　あははっ！　千早が居なくて良かつたんじゃないですか、司令？　まったく真逆じゃないですか」

「だらりっへ。」

高木司令と律子が笑いあつ……。志摩はあれで良かったのか、とう顔をしている。

「秋月律子よ、あなたの直接の上官になるわ。リーズナブルは特に気に入つたわ」

「……よろしくお願ひします」

「紹介するわ、こちからから」

律子が隣にいた2人をさす。

「三浦あずさです、」

「天海春香です！」

「艦長の日高舞です。陸奥へようこそ、歓迎するわ」

「ありがとうございます」

すつ、と3人に頭を下げる。

それから、プロデューサーと美希を待とつとつことになり、何処からかお菓子が取り出され、すつかりくつろいだ雰囲気になる。

「じりん。雪歩ちゃん程美味しくはないですかど~」

あずたさんがお茶を淹れて配る。

「ありがとうございます……しかしまあ、最近きな臭いわね」

「戦いたくは、ないのですけれど~」

律子の言葉に、お茶を配り終えたあずたさんが眉をひそめる。

「大尉、軍令部で何か聞いてない?」

律子が志摩に聞く。

「……正直なところ、絶望的かな、と」

永野さん曰く、もはや運命だ、と若干諦めの入った表情でいう。

「やつぱつはじまつちやつか~。アストリアが来たときは、もしかしたら、と思つたんだけどねえ」

・米重巡『アストリア』

客死した駐米大使斎藤博の遺体を日本まで運んできた艦だ。日米交渉間最後の蜜月とも言われる。

「じいが、で仲直り出来れば良いんですけど

と、あずたさんが首をかしげ、長い髪が肩にかかる。

「でもなあ、イギリスともでしょ？ まともに決戦出来ないじゃない」

基本的に帝國海軍が望む艦隊決戦は、水雷戦隊、機動艦隊に潜水艦や陸攻隊まで全てを動員した漸減作戦の後にあるものである。だが、巡洋艦を中心とする第二艦隊各艦は南方作戦のために持つてかかる。

これでは勝てない。

「どこのか奇襲でもするつもりかしら？」

りつりやんの眼鏡がキラリと光った。

「日本海軍の伝統で考へると、やっぱハワイ、オアフ島の真珠港でしようか～？」

「あずれさん、いくらなんでもそれは投機的に過ぎると……戦争は博打じゃないんですよ？」

「でも～、五十六さんの賭け事好きは有ねですよ～？」

「これは一本取られたね、律子君～」

高木長官がにやつとある。

「ひ……。…………やうやく、何処から彼を引き抜いてきたんですか？」

「いやいや、彼には新婚の奥さんが居てだな……「うちに来るといつて来てたんだが、代わりに彼がな……」

「え？ 彼、妻帯してんですか？」

「まあー。」

あずささんが満面の笑みで手を合わせる。

「ちゅーっ……高木長富ー。」

「いいじゃないか、別に変な話でもなかうひつへ。」

律子がジト目で志摩を見つめる。

「奥さんのために全部投げ出してこっち来たわけ？」

「ぐつ……」

それをいわれると、とか、その……なんだ……と、口づかる。

「いいじゃないですか、素敵です～」

「そりゃ……悪いとは思わないけど、ねえ？」

会議室の面々の生暖かい視線が志摩に集まる。  
その時。

「ただいまなのーー。」

「只今戻りました」

ようやく2人が帰ってきた。

「お帰り。で、如月君の様子はどうだ？ 高熱で倒れたと聞いたが」

「ええ、医務室に抱き込みましたよ」

「軍医さんの見立てでは、3日は絶対安静らしいの」「ふむ……」

顎に手をあて考え込む高木長官。

と、プロトコーサーが、見知らぬ大尉に気づいた。

「長官、その……」

「おお、忘れる所だつた。志摩君、彼等がさつき会つたプロトコーサー君と美希君だよ」

「……志摩大尉であります。ようじくお願ひします」

「うわわわわ」

「ようじくなの」

そしてまた、新たにPと美希を加えて茶飲み話のような様相を呈しつつあった。

「ともに長官」

「なんだね？」

プロテコーサーが高木長官に話しかける。

「先ほど、話があると……？」

「ああ、その話か。そうだね、…………20年も前だつたか、面白い意見を曰にしてね。……曰く『支那、朝鮮、シベリアを領有しようと思わないなら、我が国はどこからも侵略される心配は無い』と。さらに『日本の国防の為に支那が必要なのでは無い。支那の為に日本が国防をせねばならないのだ』と。どう思つかね？」

プロデューサーが慎重に言葉を選んで答える。

「…………かなりの極論、でしぇうが……満州事変以来の国際的孤立を鑑みるに、……一理あるかと」

“満州事変”

1931年9月18日、関東軍作戦参謀の石原元爾らが首謀して引き起こされた柳条湖事件を発端とし、33年5月31日の塘沽停戦協定に至る、日本と中国（国民党）との紛争である。

「首謀者と噂される関東軍の作戦参謀も、帝都動乱の鎮圧や支那事変の拡大を抑えた点は良いんですが、勝手に軍を動かしましたからね……」

「ああ。彼は非常に切れる男だ。だが……国際感覚と人心は掴みきれていなかつたね。だから、武藤を切つた……いや、刺し違えたのかね」

「えー、でもカンチは良い人だよ？ すぐ変人だけ？」

横から美希が口をはさむ。

「なんだ、知り合いか？」

「うん。昔、とってもお世話になつたの」

美希君よいかね、と咳払いする高木長官。

「あの事件からこっち、その後の処理の不味さも相まって、信用を失墜させてしまつたからね……。我々は、それしか持たないのに」

室内を沈黙が支配した。和やかな雰囲気は消え去り、だれも、身動きひとつしない。

皆の五感が高木長官に集中している。

「つまり、だ。君には、戦略的な、大局にたつた視点で作戦をたてて欲しいのだよ。

私は、普段から『生き残れ』と、『名より命を惜しめ』と、兵たちに訓示している。

無論、異端だというのは承知している。『飛行機を棄てる、帰つて来い』と、言つた時には流石に問題になりかけたがね

ふふ、と笑い、時計をちらりと見る。

「む……。つむ、決して私とて明確な答えは出せていないのだが、ひとつだけ言えることがある。

山本長官は『日本が戦えるのは1年から1年半』と、おっしゃった。だから短期決戦で講話を強いるのだとね。

だが、それではいけない。それは日本の都合でしかないのだよ。もし、アメリカと講話したいなら、リミットは3年なのだ。3年後に決戦を行い、勝利していなければならんのだ……」

ふう、と息を整える。

「まあ、まだ一ぐらか時間はあるし、私の考えが最適解といつ訳ではないだろう。

我が独立特務実験艦隊は、作戦の第一段階において南方作戦に投入されるそうだ。くれぐれも、一番良い作戦を頼む。私も、最善の決断を心掛けるし、兵たちも応えてくれるだろう

そこで言葉を切り、椅子から立ち上がる。

「期待しているよ、諸君」

そう話を結んだ高木長官は、右手をすっと挙げて一同に敬礼を行つ。その敬礼に、この場の全員が整然と敬礼を返す。

「さて、演習は明日からも続く、きちんと休むのも仕事のうちだよ」  
そつと会議室を出て行くと、やつやつ、と何かを思い出してよろしく振り返る。

「IJの演習から帰つたら、君たちの着任を祝つて歓迎会を行つんだが、その席でやる自己紹介を兼ねた宴会芸を考えておきたまえ」

「「は？」」

さうだけ言って高木長官は会議室をあとにした。

またか……、という一同の生暖かい視線を注がれながら呆然とする  
2人を残して。

つづく

## 第5話 3年の意味（後書き）

### 登場人物紹介

高木順一朗 中将

艦隊司令長官

色黒。

非常に謎の多い人物で、かなり顔が広い。

志摩大地 大尉

司令部付き副官

海兵63期卒

20代半ばだが老け顔。面長丸眼鏡で背は高め。  
嫁にぞつこんラヴ（死語）の砲術屋。

高木長官にスカウトされてきた。

### 作者

「まあ実際は水底に眠れ先生のところから拉致つてきたんだけどね」

あずさ

「水底に眠れ先生には感謝です〜」

美希

「ところで何で大地を出したの？」

作者

「本文にある通り、人材不足。正直、アイマス関連だけでは大尉以下があまりに足りない。」

あとは、一度タイミングが良かつたからだね。妻帯者とこののも大きいが「

美希

「へー。とにかく、ミキたちの紹介はナシ?」

作者

「いらんだら別に。本文で紹介しやすいし、容姿もアケマスから無印、「40」、SAYARDと引き継がれてきたイメージがあるし」

美希

「じゃあプロフィールは無印やSP・DLSそのまま?」

作者

「ああ容姿や3サイズはな、だが年齢は不明といつ設定だ。Pは海兵40期という設定だが、アイドル達は……14歳で中佐はあり得ないし、とはいえるアルにすると千早が48歳になるからな。……『冗談じゃない』

あずさ

「それはシャレになりませんね~」

作者

「でしょう?」

美希

「……それでは、『意見』感想お待ちしております、なの

## 第6話 顔合わせ その2

翌日 朝

空母『陸奥』 飛行甲板

プロデューサー

今、『陸奥』の飛行甲板を蹴つて最後の直掩機が飛びたつて行った。機数は4個小隊16機、機種は『零戦三一型乙』だそうだ。

「確かに、十の位が機体、一の位が発動機、甲乙丙が武装の改良を表す……だつたか？」

「あふう。そうだよー」

美希があぐびをしながら答える。

……やる気あんのか？

まあ、それはともかく、飛行甲板見た時から予想はしていたが……

「エンジンカバーに三等身のノーズアートはともかく、尾翼にバストップ絵つてのはやり過ぎだろ……」

上空を旋回する零戦の内4機に至つては明らかに制式色の明灰色ではない色　それぞれ薄い、緑、青、紫、黒　で全体が塗られており、それぞれ別の娘がこれでもかとばかりに描かれている。

「あんな変態どもに限つて優秀だからホント始末に負えないわよ……」

「……」

後ろから声がかかる。

「あ、でじやん」

「凸つて言つなつ！」

と、飛行服に身を包んだテコツパチ（仮称）がのたまつ。

「で？ そいつは…………ああそつ。私は水瀬伊織少佐。飛行隊長よ、覚えておきなさい」

この高飛車なテコは少佐の分際で生意氣な……。

ん？ ミナセ……だと？

まさか、“あの”水瀬の令嬢なのか！？

と、昇降機の方から誰かが駆け寄つてくるのが視界の端に見えた。

「うううーー 美希さん、おはよのいわこまーす！」

「やよいー、おはようなの」

また随分ちつここのが来たもんだ。

飛行服姿といつことは陸奥航空隊の一員だらつが、身長大丈夫なんだろうか。

「あの……美希さん。そちらの方は…………あ、新しいプロデューサーさんですか！？ よろしくお願ひしまーす！」

元気良く挨拶してくれた。そっちの凸みつよつぽど可愛げがある。

「ああ、 ジジジジナ宣じへ頼む……、 えつと……？」

「はわつ。 もうじおくれましたつ、 高槻やよこ大尉、 艦爆隊長です  
つー。」

「アリカ……。 ところで、 艦攻はどうだ？ 全力出撃訓練だから全  
機出すと聞いたんだが」

今、 飛行甲板に並んでいるのは九九艦爆ばかりだし、 チリンチリン  
と鐘を鳴らしてフル稼働するHレベーターが運んでくるのは少し翼  
の形に違和感がある零戦ばかり。

本当なら、 魚雷という重量物を抱える都合上、 一番後ろの滑走距離  
が長くとれる位置に並んでいる筈なのだが、 そこには既に艦爆が並  
んでいる。

「ん~？ 亜美の艦攻は下からだよ？」

「下？ 『赤城』 みたいに三段空母なのか？」

使いにくく・搭載機が減るといつ理由で改装されたと聞いたが。

「ちよつと違うかもです……。 えーと、 その……伊織ちゃん、 はい  
ターッチー！」

と、 ここやかに凸とハイタッチする。

「ターッチ……って、 何？ 私に説明しりつて言つてー？」

「つひ……、 ダメですかあ？ 私が説明するより伊織ちゃんの方が  
分かりやすくてできるかなー、 って思うんですけど……」

……」の上田遣い、俺なら断れねえな。

「う……。し、仕方ないわね。陸奥飛行隊の撃墜王　伊織ちゃんが説明してあげるわ！」

「最後の最後でさぶちゃんに抜かれたのに撃墜王って名乗るのはどうかなってミキは思うな」

「うわーわね！　部下に手柄たてさせるのも指揮官の勤めよー。」

「こいつ、もう5機墜としてるのか。

「で？　……射出甲板の説明ね。

射出甲板があるのは飛行甲板のすぐ下、上段格納庫の前部よ。艦首から突き出る感じで空気式カタパルトが2基あるわ。普通なら精々一度に40機しか飛ばせない所を56機飛ばせるのはコレのお陰ね

「ほつ、それは凄いな。……じゃあ、何で他の空母には採用されてないんだ？　開放式格納庫とかそれとか、いろいろ便利だらうに

そう何氣無く問うてみると、3人の表情がサッと変わった。

「あんたバカ？　新兵器が使い物になるまで一体どんだけ手間と時間かかると思つてるのー？」

「時化の度に水没しなつたり射出時に脚折れて不時着したり大変だつたんですよー。」

「それは現場の苦労を知らないにも程があるって思うな。といふか、両方とも今ある空母に設置するのは構造上ムリなの」

トリプルで怒られるハメになつた。

「……すまん」

「まあ、その辺の欠陥はウチや大亜細亜造船の技術者が空技廠や艦本と協力して改修したから安心していいわ」

胸を張つて自信たっぷりに言い切る伊織。やっぱり水瀬財閥の関係者か。

「でも、建造中の大型空母……優良客船改造の2隻と、マル4計画の正規空母と水上機母艦改造のは開放式格納庫らしいの」

「水上機母艦？……ああ、大亜細亜造船に発注された艦隊型水上機母艦か。何故今更とは思つてたが、やっぱりそういうことか」

どうせ、建造途中で突然空母へ改装を命じる、なんていう露骨な民間いじめがあつたりしたんだろうな。

「……んー？ でこちりゃん、やよい、なんか呼ばれてない？」

美希の視線の先には、いつの間にか完全に発進準備の整つた40機の艦上機と、手を振つている飛行士がいた。

「たーいちょー！ そろそろ発艦時間ですよー！？」

「中子、どう見てもまだ話は終わつてないと思ひますよ？」

もう一人の飛行士にたしなめられているように見える。

「はわっ、もうそんな時間ですか！？　伊織ちゃん、早く行きましょー！」

「わかってるわよ！……あんた、今からこの陸奥飛行隊が一航戦や一航戦にも負けない精銳だつてことを見せてあげるんだから、しつかり目に焼き付けておきなさいよなー！」

そう言い残して、既にプロペラを回していくでも飛び立てる状態の愛機へと走っていった。

「さ、プロデューサーさん、ミキ達も早く中に入る。ここに居たらジャマだし、発艦体勢に入つたら風上に向けて全速力で走るから、40km(72km/h)くらいの風になつて飛ばされちゃうの」

そつとそそくさと艦橋ぬつながるハッチに手をかけ、早く早くと手招きする美希に続いてハッチをくぐつた。

つづく

## 第6話 顔合わせ その2（後書き）

作者

「お待たせ致しました。第6話です」

黄色い方

「ねー、兄(こ)兄(こ)、亜美の出番名前だけー？」

作者

「今日はな。残念ながら中子（名字募集）と右子（本名募集）に出番とられた形になるか？」

亜美

「むー。仕方ないから用語解説だけでもするね。  
まず、『一航戦』つてのは第一航空戦隊の略で、大型空母『赤城』  
『加賀』を中心とした戦隊で、司令官は南雲忠一中将だよ。  
で、『二航戦』は、同じく正規空母『蒼龍』『飛龍』を中心として、  
山口多聞少将が指揮してる戦隊。

この2つは日本、いや世界でもサイキョーの空母部隊だったワケ。  
いわゆる南雲機動艦隊つてのは、これと五航戦をあわせたのを言つ  
んだよ

……」「んなんで良い？」

作者

「良いと思つよ。ただ……」

亜美

「一航戦の説明が必要な人は1話か2話で引き返すよね、多分」

作者

「多分、な。

ご意見ご感想、突っ込みなどお待ちしております」

亜美

「おりま す！」

## 第7話 陸奥飛行隊

第1分艦隊 空母『陸奥』

「……それでは、始めてくれたまえ」

高木司令長官の命令で、発艦が始まる。

「了解なの、発艦開始！」

射出甲板に据えられた2基の圧搾空気式発艦促進装置から、バシュツバシユツという音と共に1機づつ艦攻が飛び出してゆき、後を追つて零戦4機が飛行甲板を蹴る。

実際、こんな曲芸をすべての空母でさせる訳にもゆかず、また、たつた16機を打ち出すために大量の氣蓄器……それこそ小型艦なら艦の重量バランスを崩すほど……を搭載する訳にもゆかず、空母用空気式カタパルトは『陸奥』にしか装備されなかつた。

數十分後……、総勢56機の攻撃隊は編隊を組んで模擬目標その一、第2・3分艦隊のいる南へと消えていった。

『陸奥』艦橋横の張り出し

プロデューサー

「……で、航空隊の練度はどんなもんなんだ、実際？」

と、俺と同じく手すりに身を預けて編隊を見送る美希に問う。

「んー。……」ぐく少數のA+以外は、殆どB+とB-、正直5航戦以下なの……」

「げ、“妾の子”以下か……」

竣工まもなく、訓練時間がとれていない為に半分戦力外扱いの5航戦以下とは……。覚悟はしていたがやはりそうか……。

「むーっ、よくもわがえーーーの陸奥空をバカにしたなっ！」

とうつ、というかけ声と共に、上の見張り所から田の前になにかが降ってきた。

「その為のロッテ戦術だし、練度こーじょーの為に教導隊の兄（こ）達も頑張ってるんだよ！」

降ってきたサイドテールの娘が直掩機を指差して詰めよってくる。

「プロデューサーさん、それは無神經なの。ミキでもカンジ悪いって思うな。でも、真美もちょっと失礼じゃない？ 一応少将なんだよ？」

一応とはなんだ一応とは。これでも海兵40期では上の方だぞ？

「しつれーいたしましたっ！ じぶん、双海真美大尉、艦攻乗りでありますっ！」

ビシッ、と敬礼してみせる真美。口調に若干含みがある。

「こや、じゅうじゅん軽率だった」

とりあえず答礼しつつ謝つておぐ、せつこえは美希もパイロットだつた訳だし。

「…………といひで、『ロシテ』ってなんだ? 千葉か?」

「千葉? 何ソレ。…………ロシテってのは常に2機一組で相互支援しつつ空戦を行う戦法なの。

ちなみに、ロシテを2つでシュヴァルムっていうの。  
うちではB+とB-の搭乗員を組み合わせたロシテ2つ……シュヴァルムを小隊として、いくつかの小隊を適宜A+の教導隊員に率いてせしめるの」

「ほお。確かに今までの3機編隊よりは簡単そうだな。…………ちなみにそれは美希オリジナルなのか?」

「つづり、ドイツの駐在武官さんに聞いたの。陸軍さんも導入するらしいって」陸軍さんがね……まあ構わんが、どうも陸軍と聞くとねえ……。

「あつー。」

なにかを思つて出したよつて美希のアホ毛がピンと立つた。

「真美、試験飛行の準備は出来てるの?」

「えー、あれは午後からだからいいでしょー?」

……何の話か気になるところだが、律子が中から呼んでいるのが見えたのでそちらへ向かった。

2時間後

「対空戦闘用意！」

さて、いよいよ本日のメインイベント、艦隊防空訓練が始まる。と言つても、模擬攻撃に対空火器の照準を合わせ、撃たれたつもりで回避運動するだけ、ではあるが。

「撃ち方始めえ！」

機銃座や高角砲が旋回し、“敵機”を阻止すべく照準を合わせる。

「艦爆、軽巡『梓』に向かいます！」

8機の艦爆が一列になつて『梓』に襲い掛かる。

高空からそのまま急降下してゆき……引き起こした。

「『梓』被弾！」

『J一寧に発煙筒か煙幕か焚いて、今まで見事にJ一寧に合わせ航行していたのが、まるで本当に被弾したかのようによたよた離脱してゆく。

あずささんの操艦が見事なのか、艦の練度が高いのか。両方だろ？。

「右舷より雷撃！」

「取舵いつぱあーい！」

舞さんが必死に舵輪を回す。

艦攻16機が前方を通り過ぎてゆく。

……待てよ、残りの艦爆はどうした？

「直上オ一、急降下アーニー！」

あーあ……。

沈みはしないだらうが、空母としては沈んだも同じだな……。

暫くして

訓練を終えた艦攻と艦爆が次々と降りてくる。

「……これ、行きは良いが帰りはどうするんだ？ 全部降ろせるのか？」

艦爆と艦攻あわせて40機、もうこれ以上甲板には降りるスペースが無い。

「無理なの。直掩零戦16機 + 護衛零戦16機 + 九九艦爆24機 + 九七艦攻2号16機の合計72機を降ろせる母艦なんて何処にも無いの」

さらりと言つてのける。

「……………じゃあ…………」

「やべ、まず実戦では使えない、使う状況にならやいけない戦法なの」

そう、こんな無茶苦茶ができるのは、今回のようにて敵艦隊が近い……2回に分けて収容できる時、近くに別の飛行場がある時、あとは……。

「搭載機が半減しても構わない時、か」

不時着なり、未帰還なりで。

「やつ、でも、まともな直掩機のいる機動艦隊に攻撃したら……多分16機くらいはすぐこ……」

やられひ……帰還できない、あるいは着艦できない、か。

…………うつと話題変えるか。

「ヒーリード、『梓』は何時まであもよたよたしてゐるんだ？ 今日の演習はもう終わりだろ？」

そつそつと、海図に田を落としていた律子が振り返ってすつとんきよつな声をあげる。

「あれ？ 言つてませんでした？ 昨日からずっと……後1時間弱は対潜水艦訓練中だつて」

聞いてないぞ……つて！

「……潜水艦にしたら今がラストチャンスじゃないか？」

発着艦作業中は一定の速度で走るし、舵も切れない。

「Jの速度では追い付けないだろうが、もし、待ち伏……」

「左舷より雷跡4！ 回避不能！」

つづく

## 第7話 陸奥飛行隊（後書き）

作者 「……それでは『意見』『感想』お待ちついで……」

亜美 「ちょっと兄（い）ー！ 亜美的出番はー…？」

作者 「（のワの）」

亜美

「（い）つも見てよー…」

美希

「『亜美は不憫』ってカンジ？」

亜美

「（い）つも見てよー… 出番分けてよー…」

作者

「わかった、前向きに善処するから……。あと、これは美希に限らないけど、暫くしたら『陸奥』からアガ動くから出番減るよ」

美希  
「なのつー…？」

亜美

「やつた『意見』『感想』いつでもお待ちしてねよ、兄（い）姉（



第8話 液冷機の羽ばたき（改1）（前書き）

改定箇所

登場飛行機の変更

少々加筆

## 第8話 液冷機の羽ばたき（改一）

昼過ぎ

空母『陸奥』飛行甲板

先程の醜態　航空攻撃を『陸奥』中破『梓』小破で乗りきったにも関わらず、最後に潜水艦からの雷撃を喰つてしまつた　で沈んだ雰囲気を、変えてくれそうな澄みきつた空に、零戦4機が旋回している。

甲板上では、1機の単発機が暖気運転を行つてゐる。

『十二試艦上爆撃機』

現在海軍の主力を勤めている九九式艦爆の後継機として設計されている機体だ。

この飛行機の特徴は、なんと言つても日本機には珍しい液冷発動機を使つてゐることだらう。海軍航空廠で設計され、液冷発動機に定評のある水瀬発動機と有名艦爆・水上機メーカーの愛知時計電機がタッグを組んで生産した高性能艦爆……という触れ込みである。

今、甲板上で暖気運転を行つてゐるのは試作6号機で、その高速性能に目をつけた海軍が偵察機として転用し、実戦部隊での試験に回した4機の内の1機である。

『陸奥』艦橋前

プロデューサー

「発進準備、まもなく完了します！」

「わかつたの。そのまま続けて」

甲板員の報告に落ち着き払つた様子で答える。  
美希は特に飛行試験に不安を感じていないうつだ。それだけ自信があるのだろう。だが……

「しかし、本当にこんな性能が出せるのですか？」星井中佐

実際、志摩大尉の懸念も最もだと思つ。

液冷発動機は未だ我が国の生産技術では量産が難しく、不調を起しありと聞くからだ。

ところが、その一言で美希の表情が不満のそれへと変わる。

「……それは心外なの。わざわざでこちやんここまで行つて整備講習受けさせたんだよ？ ウチの整備員は液冷発動機の整備も完璧なの。新人さん2人は黙つて見てて欲しいな」

言いながらメインマストの信号桁を見る……現在第五戦速。合成風速は35ktを越える。

「発艦始め！」

最後まで機体にとりついていた整備員が待避し、遮風柵が倒されて真美の乗る十三試艦爆が滑走を始める。

「「おお……」「

甲板の半分を使って滑走した後、十三試艦爆は飛行甲板を蹴った。そのまま上昇していき、ある程度高度を取ると零戦に瞬く間に追いついた。あわてて振り切ろうとするが、抜かされてしまつ。

「戦闘機より速い……」

この性能なら偵察機としては勿論、爆撃機としても十分使えそうだ。

「どう? 不具合起らなければ見えた? ラブ・ラブさん」

美希がしたり顔で言つ。実際に見せられては反論のしようがない。ちよつと悔しいが今回は俺たちの負けだ。それに志摩大尉など、別の意味でも敗北している。

「すいません私が悪かったです。あとお願ひですからそれはやめてくださいお願ひします……」

顔を赤らめながら頼みこむ志摩大尉。

彼にこんなあだ名がついたのは、昨日の夜、律子に「呼び捨てで良いわ」と、言われた志摩大尉が「あの……呼び捨ては、妻だけど、決めて、あります、ので……その」と、顔を真っ赤にしながら嫁溺愛宣言をきましたからなのだ。

まあ、面白いのでほうつておく。

「あら、なかなかイイ感じに飛んでるじゃない

「律ちゃん信じてなかつたの?」

「ナウヒーフケではないんだけどねえ……」

艦橋から律子と真美が出てきた。

……ちょっと待つて星井。あの飛行機を飛ばしているのは誰か  
？ 真美だ。じゃあ目の前にいる真美は？

姉妹……は考えにくい、そういう人事……同じ艦に肉親を乗せるこ  
とは原則無い。

じゃあアレだ、ドッペルゲンゲルってやつか、世の中には生き写し  
が3人いるってやつ。

……まてまて落ち着け俺、それは無いだる。……推理小説とかなら  
既にヒントがあつたハズだ。

……そうだ、武田先輩のファイル、完璧に忘れてた。

……えー、航空隊は、……沿革……『鳳翔』……空地分離……漢口進出…  
じやなくて、名簿、歴代隊長のは……これが。

双海、双海……と、あつた。艦攻隊長の双海……亞美？ 確か真美  
が艦攻では？ ……いた。

なるほど、真美は艦攻から艦偵に乗り換えてるのか。で、ややこし  
いが艦偵隊にも艦攻はある、と。

つまり亜美と真美の双子、ということとか。……まず、女子飛行兵の  
配属先はここしか無いよな。うん。

「プロデューサー、いらっしゃいましたんですか」

律子が一いち方に気づいたようだ。

「ああ。探させたか？ ……そいつは？」

「そいつって……双海大尉ですよ。もうお会いになつたでしょ？」

何をいつのか、という表情を作つてみせる。が、目が面白がつてゐるぞ、律っちゃん？

「いや、真美には会つたがそいつはまだだな」

そう言つと、2人は顔を見合せる。

「……騙されなかつたわね」

「外からきた人、絶対ダメされるのにね」

ひどい奴らだな。といふか直属の上官をおちよくるなよ。

「兄（じ）鋭いね。あ、亜美は双海亜美、艦攻隊長だよ。気づいてると思うけど、真美とは双子の姉妹で、見分けたは髪留めの位置、飛行服のマフラーの巻き方、制帽の傾きが逆で、髪留めとマフラーの色が違うことだよ。

ちなみに専門は雷撃だよ。真美は偵察飛行がメインだからそこも違  
うね」

なるほど。しかし瓜二つとはこの事か、といふほど似てゐる。今聞いた特徴なんか入れ替えたらわからなくなるものばかりだしな……。黒子なんかいかなど探していると、律子が何か思い出したようだ。

「そつそつ、高木長官が話があるそうです」

「ん、わかつた。すぐ行く」

「プロデューサー、入ります！」

何故かここでも参謀長ではなく、プロデューサーなのだが、何故かそれが自分でも自然に思えてしまう。不思議だ。

「入りました」

高木長官は書類仕事に追われているらしく、机の上に置かれた書類に目を落としたまま、俺を招き入れた。

「悪いね、急に呼び立てて」

書類を脇にじけて顔をあげる。

「いえ」

「実は君に渡したい物があつてね」

そこで俺が渡されたのは、『演習終了時迄開封ヲ禁ズ』と大書された極秘スタンプつきの封筒と……

「演習最終日の水上戦闘演習につ分艦側で参加……ですか？」

翌々日の演習に襲撃側で参加せよとのお達しだった

נִיר

## 第8話 液冷機の羽ばたき（改1）（後書き）

美希

「…………」

作者

「重ね重ね申し訳ござりません」

美希（ゆっくり声）

「バカなの？ 死ぬの？」

作者

「はい……」

少し離れた所

響

（なんかでづらいで……）

雪歩

（ほら真ちゃん、頑張つてー！）

真

「えー、こんな駄作ですが、今後ともどうぞよろしくお願いします。  
次回はボクたちも出ますよー。」

## 第9話 顔合わせ その3

翌々日

第2分艦隊 打撃艦『多良』 艦長公室

第2分艦隊旗艦『多良』の艦長室、1分艦に対する襲撃訓練の詰め  
といふ名田 実際は顔合わせ で分艦隊幹部が集まっていた。  
今いるのは、分艦隊司令官の音無小鳥少将、水雷戦隊司令の我那霸  
響大佐、『由布』艦長の萩原雪歩大佐の3人で、まだ来ていない2  
人を待ちながら話に花を咲かせている。

「2人とも遅いわね」

小鳥が壁に掛かった時計を見る。時間まではまだ少しあるとはいえ、  
部屋の主も居ないのはおかしいと言える。

「真ならさつき艦橋で副長と話しこんでたぞ。……お、雪歩、今日は  
のはまた一味違つた」

「あ、わかつた？ 今日はちょっと冒険してみたんだ」

この2人はあまり気にしていないようで、それよりお茶の方に話の  
重心が移っている。

と、その時小鳥はドアの外に何者かの気配を感じた。

## プロジェクトコーラー

今、俺は“高速打撃艦”とやらの艦内を案内の少尉について歩いているのだが……、まあ普通だな。意外と。

イメージとしては外洋モニター艦だと聞いたから、さつきエレバス級モニター艦のような奇形かと思ったらそうでもなく、むしろポケット戦艦に近い艦型だし、民間の……大亞細亞造船で建造されたためか、任務に後方攪乱も含まれるからか、居住性も良さそうだ。

さて、実は、初日に会った皆さんと違つて、さつき艦橋で挨拶した女顔の『多良』艦長以外の2分艦幹部とは面識がある。

中でも雪歩とは同じ砲術屋の縁で何度も話したことがある。彼女は一見すると氣弱で人付き合ひ、特に男性との を苦手とするが、その実なかなか芯がつよく好感の持てる性格だ。ただ、ある一線を越えると、本人曰く「自分が自分じゃなくなる」らしいので注意、と。

次、我那覇響。名字でわかる通り沖縄の出で、その事で「ちや」ちや言つ輩もいるようだ。まあ、ここには琉球・台湾出身の者も多くいる（と言つよりわざと集めた）と聞くし、そんなことは少ないだろ？ 専門は水雷で、わりと突撃バカ……もとい、勇猛果敢な指揮官との評判だ。

最後に、音無小鳥。……なんと言つか、優秀ではあるのだが、いかんせん……

「……あの、艦長室はこちうりですが……」

ふと顔をあげると、案内の少尉が所在なさげにこちらを見ている。

いかんいかん、考え方夢中になつて田代地についたのも気付かなかつたらしい。

「おお、ありがと。助かつたよ」

「いえ、……それでは失礼します」

田代して言葉少なに立ち去つていぐ。

さて、ずいぶんご無沙汰だが元気にしていただろうか、と考えながらドアをノックしようとした時、いきなり後ろから話しかけられた。

「あれ、プロデューサー？ もしかしてボク追い付いたやいましたか？」

それとも待つていて頂けたんですか、といながら回り込んでくる菊地……なんだっけ。とにかく菊地大佐。先ほど艦橋で、先に行つていて欲しいと言つていたのに、もう追つ付いてきたらしい。足の速い奴だ。

「ああ……こや、そいつは駄ではないが……」

さて、ここで一つ問題がある。それは、

「こいつ、男？ それとも女？」

確かに、名前を見た時は男だと思ったが、石川さんは“実”一字で“みのり”って読むし、“千早”もどちらかといえば男の名前だ（普通は名字）。

さて、どうするか……。直接聞くのは失礼だし、雪歩の反応を見るのも手だが、親しければあんまり変わらんからな……。

「……どうかしましたか？ 入りますよ？」

いかん、まだ。この癖はビリにかしないとな。  
そんなことを考えていると、菊地大佐に手を掴まれてそのままドア  
の内側へと引っ張りこまれてしまった。

「お待たせー！ 紹介するよ、新任のプロロ」

「おー、久しぶりだな！ 自分のこと覚えてたか？」

「お久しぶりです。今、お茶淹れますね」

引っ張りこまれた先では見知った3人が迎えてくれた。

「もちろん覚えていたさ響。雪歩、いつもありがとうな。2人とも  
元気そうで何よりだよ」

本当にかわりなく元気そ�だ。

「……あのー」

さつきから驚いた顔のまま固まっていた菊地大佐がおずおずと声を  
あげる。

「もしかして、みんな顔見知り？ ボク以外」

「あれ？ プロデューサーと面識無いの真ちゃんだけだつて言わな  
かつた？」

「…………そういえば聞いてたかも……」

軽く落ち込む真。

そのの背中をポンポンと叩きながら、小鳥さんがちょっと拗ねた声を出す。

「 もう、私はスルーですか？」

出たなぴよ助。彼女を評して、「天は一物を与えない……」「えた場合はどうこかでバランスをとるのよ」とは良く言つたものだ。

「…………ともあれ、Holo Fleet 第2分艦隊へようこそ。  
一同、歓迎致します」

小鳥さんと共に、響、雪歩、真がサッと敬礼する。

「 かたじけない」

俺も答礼を返し、手を下げる。

「 さて……とりあえず、」

この場の最高指揮官である小鳥さんが話しあじめる。  
早速本題に入るのかな？

「 お茶の続きをしましょつか」

「…………おいぴよ助」

期待した俺がアホみたいじゃないか。

「何ですかプロデューサーさん。お茶菓子もありますよ？」

「わあい……じゃなくて！」

「……案外プロデューサーって面白い人だね。見た目と違つて」

「真もそう思うか？自分も最初はな……」

ああもう、2人ともにやにやするな響も余計なこと言つな……。

「はいどう。プロデューサー」

頭を抱える俺に、雪歩が湯呑みを差し出してくれる。本当に雪歩は  
かわいいなあ。

なし崩しにお茶会突入

そして完全に雑談タイム

「……それでさあ、それ以来会つ度に自分のこと詐胸詐胸言つてく  
るんだぞ」

あの百貫デブが。と、真相手に氣炎をあげる響。なんか、すごくそ  
の人物に心当たりがあるが、そんなことより今は目の前の最後の玉  
羊羹の行方の方が大事だ。

「 「 .....」

俺と小鳥さん。その間にはただ一つ残された玉羊羹。  
この勝負、先に氣を抜いた方の負けだ。

「響、あの人は上官なんだからさあ、その呼び方は不味いんじゃ……」

「真だつてさあ、男女とか言われてただろ？ 腹立たないのか？」

「えー、でも、あの後『妻子』がいなければ、抱きたいくらいにいい女だと思っている！』『多少ボーリッシュな所はあるけど、それこそが君の魅力だと私は考えている。むしろ、その分可愛さも引き立つと言つうかだな……』って」

「完璧に誤魔化されちやつて……。絶対、心の中でほくそえんでるんだぞ……」

「まあまあ、2人とも落ち着いて、ね？」

雪歩が宥めに入ったようだ。  
しかし、なかなか小鳥さんも手強く、なかなかスキを見せてくれない。

「プロデューサーさん、この場の最高指揮官は私ですよ？」

「アホぬかせ。俺のが先任だろつ」

この辺少々ややこしいのだが、参謀は指揮官の補佐が仕事で、基本的に艦隊指揮はしないのだ。……なんか不毛な争いな気がしてきた。

と、2人を宥めた雪歩がこちらに来る。

「音無さん聞いて下せよ。2人とも子供みたいな言い争いして……、あ、余つてゐなら頂きますね」

「ううう」と、おもむろに皿の前の懸案事項につまよじを突き刺し、口に運んだ。

「「あつ……」」

「……？　びつかしました？」

なんだこの状況……これぞまさしく、

「漁夫の利、ですね」

「だな……」

2人してがつくりとうなだれる。

今までのこりみ合にはいったいなんだつたんだ……。

「なあプロトユースター。そろそろ本題に入つた方が良いこと思つやつ。」

「そうですね、今回の演習はどんな状況なんですか？」

さつさまで言い争いしてた響と真がもう立ち直つている。切り替えの早いことで。

こちらも氣を取り直していく感じよ。

「それについては……これを見てくれ

## 想定状況

本海域に来襲した空母を中心とする小規模な敵任務部隊は、在泊艦艇及び基地施設に攻撃を加えた後、逃走中である。

既に、我が方の航空攻撃により損傷を負わせたものの、戦果は不十分である。

I F（独立艦隊）2分艦は、逃走する敵任務部隊を追跡、捕捉し撃滅せよ。

最優先目標は空母とし、巡洋艦、駆逐艦の擊沈は副次目標とする。なお、打撃艦の喪失は認めない。

## 彼我戦力

- ・ 第2分艦隊 音無少将

打撃戦隊 菊地大佐

打撃艦『多良』『由布』（小破）

水雷戦隊 我那霸大佐

軽巡『夕張』

第1駆逐隊 第2駆逐隊（2隻出撃不能）

計、打撃艦2、軽巡1、駆逐艦6

- ・ 敵任務部隊

空母 25番通爆3発、航空魚雷1本命中

甲板中破発艦不能、出し得る速力20kt程度と認む

巡洋艦 25番通爆2発命中

小破ないし中破と認む

計、空母1、巡洋艦1、駆逐艦4

以上

「どう思つ?」

「……すじへ、ノルウェー沖海戦です……」

「去年の英空母『グローリアス』VS独巡戦『シャルンホルスト』『グナイゼナウ』のやつね。ナルヴィクからの撤退を支援中の英艦隊を独艦隊が捕捉、殲滅した」

真の弦を小鳥さんが補足する。

「私と真ちゃんの統制射撃でアウトレンジ出来れば最高なんだけど

……」

「絶対、防空戦隊が阻止しに出てくれるよな」

真と雪歩が顔を見合せて頷きあつ。

「自分の水雷戦隊も忘れないで欲しいんだぞ。それを排除する為に

自分たちがいるんだからな！……不安があるとしたら雷撃型駆逐艦が半分に減つてることくらいだぞ」

胸を張つて響がその心配に答える。本物かな、あれ。

水雷戦隊の駆逐艦は、初春級程度の艦体に、14センチ単装砲3基、8・8cm連装高角砲2基を積んだ『霞』型、四連装魚雷発射管3基と8・8cm連装高角砲1基を積んだ『月』型の2種類で編成されている。

ちなみに、実際使ってみると使いづらいことがわかつたので、後継艦の建造が進んでいくそうだ。……何故作る前に気付かなかつたのか、大いに疑問だが。

「さて、まあ相手が誰であれ、全力を尽くすのが私たちの仕事よ。プロデューサーさんも、私たちの戦い方を見て、最適な作戦を立て下さいね」

「解つた。じっくり見せてもらひよ」

高木長官が俺をこちらに参加させたのは、ううう意図でなんだろう。武田先輩の言う通り癖の強い人と艦だが、見事使いこなして見せようじゃないか。

「それでは、今演習の完全勝利を目指して……」

「えい、えい、おーーー！」

同時刻、第1分艦隊

「あら、向こうはもう勝った氣でこるやうな」

「では、艦隊戦を教育して差し上げるの」

「私の『陸奥』に常識が通用すると思つたら大間違いよ」

「私がいる限り、空母には指一本触れさせない!」

ついで

## 第9話 頭合せ やの3（後書き）

作者  
「お待たせしました。響登場です！」

真  
「ボクたちもでしょ」つーっ！」

雪歩

「みんなダメダメな私は、穴掘つて埋まつてますう～～！」

響

「誰もそんな」と言つてないぞー」といひで、次回は「よいよ演習か？」

作者

「ええ。ピコ助の妄想が炸裂します」

小鳥

「ピコッ！？」

雪歩（穴の中）

「それでは、『』意見『』感想お待ちしておりますう！」

## 第10話 演習1941（1）（前書き）

演習時は、可能な限り実戦と同じように行動せねばならない。  
その為に、必ず射撃開始時には演習弾または空砲を撃つこと。  
被弾判定が出ればその被害にみあつた行動をとり、戦死判定を受け  
ればその場で死んだフリをし、以後演習終了まで隅っこで黙つてじ  
つとしていること。

演習が終了したら、各艦隊指揮官は演習の模様を主観的にまとめ、  
それを資料として感想戦をすみやかに行うこと

独立特務実験艦隊 演習の手引きより抜粋

## 第10話 演習1941（1）

1941年11月6日

演習海域

第2分艦隊

分艦隊旗艦『多良』

戦闘配置についた打撃艦の艦橋は緊張感がみなぎっていた。司令官をはじめとして、艦長も幕僚もみな真っ白の第一種軍装を纏つている。

「水観より入電！『敵艦隊、進路陣形速力変ワラズ。巡洋艦、水観を射出。我、触接を継続ス』」

通信兵が観測機からの報告を読み上げる。

敵艦隊は依然、空母を中心とした輪形陣のまま、速力18knで西に向かっている。

「……頃合いね。艦隊全艦へ打電。全艦最大戦速。水雷戦隊は突撃開始よ。私達は2万5千で射撃開始」

容姿端麗頭脳明晰才色兼備と評判の音無小鳥分艦隊司令官の命令がとぶ。

「了解！最大戦速！総員水上打撃戦よーい！砲術長、統制射

撃戦装置作動、目標選定『由布』に委任!』

菊地真大佐が命を下したあと、雪歩ならやつてくれるわ、と、小さく呟く。

何しろ、今この艦に続航する『由布』艦長である彼女は、以前の演習にて、距離32000mで命中率12%を叩き出した逸材である。邪魔が入らなければ、傷ついた空母如き沈められないはずがない。

「水雷戦隊、離れます!」

外を見ていた見張りが叫ぶ。

打撃艦の前方を進んでいた水雷戦隊が更に速力をあげ、突進を開始したのだ。

水雷戦隊旗艦『夕張』

水雷戦隊は打撃艦の前方5000mを、第1駆逐隊、『夕張』、第2駆逐隊の順に単縦陣を組んで航行していた。

「敵艦隊見ゆ、12時方向、距離2万7千!」

「『多良』より入電!『突撃セヨ』です!」

「よおし、1駆戦へ、敵駆逐艦隊を排除せよ、以後の行動を隊司令に委任。』

本艦と2駆戦は統制魚雷戦よーい!各艦最大戦速!突撃せよ。繰り返す、突撃せよ!」

見張りと通信員の声に、水雷戦隊司令官、我那覇響大佐が、剣帯の短剣の横に帶びた釵を抜き放ち、敵艦隊を指して命じる。

彼女の脳内にある作戦はこうだ。

まず、1駆戦の有する14cm砲12門、88mm砲16門の火力で護衛の駆逐艦を排除。その後、『夕張』と2駆戦が突入り、魚雷28本を手負いの巡洋艦か空母に叩きつける。敵が艦上機を使えない今、どう転んでも勝利は間違いないのだから。

……責めるのは酷かも知れないが、それは完全に油断だった。

「敵駆逐艦、煙幕展開！ 分離して向かつて来ます！」

分艦隊旗艦『多良』

「……煙幕？ ……早すぎる」

煙幕は敵のみならず、味方の視界も妨げる。あんなバラバラに走りながら展開したら危険だ。

一体何を企んでいる……。菊地大佐が顎に手をあてて考えこむ。

「そうだ、水觀は？ 連絡はないのか？」

傍らの通信兵に問いかけるも通信兵の表情は芳しくない。

「それが……、『ワレ、テキカ……』との通信を最後に応答がありません……」

ふむ、と音無司令官が呟く。

「……墜とされようね。観測機かしら?」

「多分……。『我、敵観測機の攻撃を受く』が、途中で途切れたらでしょうね……」

菊地艦長も眉間にシワを寄せて応じた。観測機が使えないといふことは、最も安全な遠距離砲撃戦が封じられたことを意味するからだ。

「『由布』の観測機を上げさせるのは……」

「無理ね。墜とされるのがオチよ」

こちらの艦載機は両艦あわせて『愛知10試水上観測機改』と『愛知12試三座水上偵察機』が2機づつの合計4機。

水觀は競作に敗れたものを改良した機、水偵は正式採用前の増加試作機だが、それぞれ零觀や零式水偵とそう変わらない性能である。とはいっても、相手も同じものを持っている以上それに意味は無いのだが。

「仕方ありませんね。先程の命令は撤回。1万8千まで引き付けてから射撃開始。副砲は射程に入り次第自由射撃。水雷戦隊には敵駆逐艦の排除を重ねて命令しておいて」

音無司令官が命令を修正するのを聞きながら、プロデューサーが額を軽く叩いて俯く。

「如何されましたか?」

傍らにいた艦長付の少尉が問いかける。

「いや、な……」

どうも嫌な予感が、といつ続きは飲み込んで言葉を濁す。

しかし、彼の予感はすぐに現実のものとなる。

水雷戦隊旗艦『夕張』

「駆逐艦隊を排除せよ！？ 言われなくともやつてるぞ！」

「1駆戦左回頭！ 同航砲戦に入ります！」

舵を握っていた我那覇大佐が不機嫌そうに顔をしかめ、舵輪を指で叩く。

艦橋からは、斜陣で航行する敵駆逐隊と同航砲戦に入った1駆戦が全砲門から発砲炎を煌めかせているのがよく見え、双方の周りには“水柱が立ち始めた”。

その時。

「駆逐艦『朝靄』被弾、炎上ッ！ サラに『夕靄』爆沈ッ！」

通信兵の絶叫が艦橋にこだまする。

1駆戦の先頭艦（朝靄）は“燃え盛り”、2番艦（夕靄）は“真つ二つに折れて”しまっている。

「ぬー！？ ゆ、誘爆でもしたのか！？」

驚くのも無理は無い。

敵の101型駆逐艦の片舷投射力は88mm砲6門。対して1駆戦朝靄型は140mm砲3門と88mm4門で、隻数も同じく4隻とほぼ互角。さらに敵は煙幕を張っているのと、こちらは斜陣の頭を抑え気味に機動していることを考えれば、こんなに早く2隻が仕留められるとは考えにくい。

……駆逐艦4隻対4隻ならば。

「…………観測機…………？」

先程から上空を舞っている水觀にふと目をとめる我那霸大佐。

「…………そうだ、わかつたんだぞ！ あの早すぎる煙幕は巡洋艦を隠すためか！」

もし、もひとつ早く観測機の意味に気づいていたら。或いは、この時低空から忍び寄る別の機影に気づいていたら。  
また結果は変わっていたろう。

「前方、煙幕の影から機影ッ！」

見張りが叫んだ時にはもう遅すぎた。

？？？？？

「敵水雷戦隊目視、まだ気づいてないよ」

「無理もないの。フツー甲板中破したら空母は終わり。それが“常識”なの。それより……」

「わかつてゐるよ。狙いはただひとつ」

「「戦隊旗艦の艦橋」」

「じゃあ左に避けるから、旋回機銃はヨロシクね」

「任せろな」

つづく

## 第10話 演習1941（1）（後書き）

作者

「……我ながら変な描[写]だなあ。演習なのに実弾ぶつぱなしたり、目の前で起じたことを通信兵が絶叫したり」

少尉

「まあ、常識的にはそうですね。あ、申し遅れました。前話から登場のモブ少尉です。ちなみに素直クール系美少女です。ビリヤード口シク」

作者

「自分で言つか？ それ」

少尉

「素直ですか？ちなみに、“ぬー”ってのは、標準語で言つて“何だ”って意味です」

「ご意見ご感想お待ちしております

## 第11話 演習1941（2）

水雷戦隊旗艦『夕張』

「前方、煙幕の影より機影ッ！」

見張り員が叫ぶ。ガラスが外されて吹き飛らしの艦橋でも、まつすぐじきに向かってくる艦上機が見えた。

「何ぼやぼやしてゐひッ、機銃撃てッ！」

そう叫びながら舵輪をまわす我那霸大佐。

「やつた！ 命中！」

艦橋そばの13mm連装機銃が射撃を開始したかと思うと、どうやら搭乗員に命中したらしくそのままふらふらと右へ流されてゆく。

助かつた……。そんな空気がその場を支配した。

その時……、恐らく、最期の力を振り絞つてだらう。敵機の後部旋回機銃が火を吹いた。

「んなー？」

それが、我那霸大佐の最後の言葉となつた。

そのまま、彼女の体は舵輪にもたれ掛かるように崩れ落ちた。

『夕張』が一所をぐるぐる回り出した時、銃撃を行つた敵機もまた、

“力尽きて海面に激突” “炎上した”。

分艦隊旗艦『多良』

「水雷戦隊司令官戦死ッ！ 同戦隊、混乱している模様！」

通信兵の報告が艦橋に響きわたる。

「響が！？ ビリして！？」

「まさか、艦載機！？ でも、甲板は中破、艦載機の発進は出来ない筈……」

狼狽する2人をよそに、プロデューサーが静かに言った。手元には件のファイル。

「……カタパルト。カタパルトだ。零式複座艦偵も射出できる」

「そんな……」

艦橋に詰めていたメンバーが皆驚きの表情を見せるなか、艦長付少尉の、カンニング乙、という咳きは華麗に黙殺された。

「砲術より艦長、司令官。間もなく駆逐艦を目標に射撃開始します。なお『由布』からは次弾より目標直前で炸裂するよつ信管を調定せよとも言つてあります」

スピーカーから砲術長の声が確認をとる。

現在、砲術の指揮をとっているのは『由布』であり、その艦長である萩原雪歩大佐なのだが、一応それを司令官に伝えた訳だ。

「先に駆逐艦を始末するのね。問題ないわ。

艦長、雷撃に注意しつつ可能な限り寄せて頂戴」

「了解、敵駆逐艦主砲の最大射程1万3千まで舵そのまま」

「よーそろー」

その時、丁度『由布』が駆逐艦隊へ初弾を発砲。『妙良』もそれに続いた。

打撃艦『由布』

「3……2……1、着弾、今！」

「命中！ 敵2・3番艦沈みます！」

同航砲戦に入つて交互撃ち方で十数射、やつとのことで命中弾を得た。

狙つていた2番艦と巻き添えを喰つた3番艦が落伍してゆく。

「これだけ撃つてやつととは……皆さん弛んでますう」

萩原艦長としてはこの命中率が気に入らないようだ、大体この距離で挟叉まで何発撃つてるんですか、と不満たらたらである。

「しかし艦長、こればかりは判定官の「航海長?」……もとい、神の振る賽の目次第ですか?」

砲員の責任ではないと言外に認めかす航海長に、何が気に障つたのか怖い目付きになる艦長。艦橋にひんやりとした空気が流れれる。

それを打ち破るよつに怒涛の勢いで報告が舞い込む。

「副砲弾、敵1番艦に命中！ 行き足落ちります！」 「煙幕薄まりま……敵甲巡発見！ 距離1万8千……そらく後方……なつ……？」

見張りの言葉が途切れる。

「なんですか。報告は最後まで……えつ……？」

煙幕の向こうから姿を現したのは、巨大なのっぺりとした艦影……航空母艦『陸奥』だつた。

「何故……何故逃げていないので……？」

敵艦隊の常識はずれな行動に驚きを隠せない艦橋要員。  
そこに追い討ちをかけるように悲報が舞い込む。

「通信より艦橋！ 旗艦より入電。……『我、艦橋二被弾、司令官・艦長戦死、幕僚全滅。戦闘不能、指揮権ヲ委譲シ離脱ス。貴艦ノ武運長久ヲ祈ル』……以上です……」

少し前

分艦隊旗艦『多良』

「煙幕、晴れます……敵巡洋艦発見！ 距離2万弱！」

見張りから巡洋艦発見との報告が入る。

「……なるほど、そういうカラクリか……待てよ?」

プロデューサーが呟くのを他所に菊地艦長が矢継ぎ早に命令を下す。

「砲術！ 予備命令、次弾より砲撃目標巡洋艦！」

通信！ 『由布』に対し、巡洋艦発見、砲撃目標変更を具申す。

と…」

これは、砲撃目標を『由布』に委任している為に予備命令という形になつたのだ。

……しかし、この二つの命令が実行に移されることはついたがつた。

この直後、敵巡洋艦から放たれた15サンチ砲弾が『多良』の艦橋を掠め、そこにいた者達全員の命を刈り取つて……

「なあピヨ助、この戦記風報告書に何の意味があるんだ？」

「まあまあ、そう言わないでくださいよプロデューサー」

「高木長官には深あーい深慮があありますよ。多分」

人気のあまり無い士官食堂で、報告書のまとめをしていた小鳥と真、そして通りすがりを捕まつたプロデューサーの3人が話している。既に演習終了から2日、艦隊のほとんどは母港下田に艦体を休めていた。

「ところで、一つ質問があるんだが、良いか？」

「ボクに答えられる範囲なら。何でもどうぞ」

書類から田をあげてプロデューサーに向き直る真。

「なんと言つか、正直死にすぎだろ？ 何回『艦長戦死判定！』って聞いたかわからんぞ」

ちなみに、各艦の艦長で生き残ったのは『由布』の雪歩のみで、千早と舞の二人もあの後41サンチ砲の直射を乗艦に喰らい戦死判定を受けている。

「それは判定表のせいとしか……。あと、時間短縮のために命中率がかなり高く設定されてるし、あれだけ沈めばそりやあ……」

そう言いながら机の書類を手にとる。

凡例

艦種『艦名』最終状況

合計損害

被弾数

第1分艦隊

・航空戦隊

空母『陸奥』沈没

司令長官戦死 艦長戦死 幕僚全滅

41サンチ砲弾12発 魚雷2本

・防空戦隊

軽巡『梓』沈没

司令官・艦長戦死

41サンチ砲弾2発 14サンチ砲弾多数

第3駆逐隊 3 / 4隻沈没

火災発生

14サンチ砲弾・12・7サンチ砲弾多数

## 第2分艦隊

・打撃戦隊

打撃艦『多良』大破

司令官戦死 艦長戦死 幕僚全滅 航行不能

15・5サンチ砲弾5発 魚雷3本

打撃艦『由布』小破

速度3kt低下

15・5サンチ砲弾2発 至近弾数発

・水雷戦隊

軽巡『夕張』中破

司令官・艦長戦死

機銃掃射

第1駆逐隊 4 / 4隻沈没

隊司令戦死

15・5サンチ砲弾・12・7サンチ砲弾多数

第2駆逐隊 2 / 2隻戦場離脱

被害なし

被害なし

被害なし

「無事に済んだのは混乱して離脱した2駆だけですね」

「ほら、『夕張』が銃撃された時ですよ、と真。

「ああ。……あとだな、真は『多良』振り回して長いんだろ?」

「ええ。人事異動は滅多に無いんで」

理由は簡単。異動先がほとんど無いからだ。

「では聞くが、打撃艦というのはどんな艦種なんだ? 今一納得がいかない」

戦艦としては主砲の数が足りない。巡洋艦にしては遅い。モニター艦にしては豪華。田指すところがよくわからない。

「……そうですね。強いて言つなら高速外洋モニター艦、ですね」

ある程度の速力をいかして敵の有効射程外から41サンチ砲弾を送り込む。主要部の装甲は対20サンチ防御なので重巡以上と撃ち合ふのは不可能、さらにその巡洋艦でも倍居たら対抗不可能。難儀な艦ですよ。と、嬉しそうに言う。

「まあ、元々この艦隊だけで戦うのは精々軽偵察艦隊までで、戦艦なんかが出てきたら連合艦隊から応援がくることになってるんで問題無いといえば無いんですけどね」

「成る程。と、なれば……目標は決まったな」

うん、と一人首肯するプロデューサー。

「あ、南方作戦の件ですね? それで、米アジア艦隊ですか? そ

れとも英東洋艦隊ですか？」

「いや違う。……それに、採用されるとは思えんし、多分に俺の思考を見るテストとこいつだらうからな」

今から新たな作戦を立案するのは間に合わないだらうしな、ヒプロデューサー。

「じゃ、陸さんの直接支援……ですか？」

少々不服げだ。

「なんだ、やはり砲術屋としては艦砲射撃では不満か？」

「いえ。それに、ボクは水雷屋ですよ。……その、生身の兵隊やトーチカ如きに41サンチ砲が必要ですか？　と、思いまして」

海軍にいると忘れがちになるが、駆逐艦の豆鉄砲でも陸では重加農砲である。

「いやいや、狙うのは戦艦級の砲だよ。でも艦じゃない。……わかるかい？」

あまり考えた様子を見せずに真が答える。

「……いえ、どうですか？」

「米領フィリピン、コレヒドール要塞の36サンチ連装砲を中心とする重砲群、だ」

これなら打撃艦の41サンチ主砲でアウトレンジできる。呪いと思わないか、ヒプロデューサー。

「……なるほど、良こと思こます」

射程と威力だけなら『長門』と同じですからね。と、笑う。そして、ちらりと懐中時計を見た。

「とにかくプロテューサー、長官との約束、そろそろじゃないですか？」

「お、もういい時間だな。じゃあ小鳥さん、失礼しますよ」

書類に顔を向けたままの小鳥に一聲かけ、腰を浮かせるプロテューサー。

「はい、助かりました。プロテューサーさん、頑張ってくださいね、高木長官は思考過程も説明をせますから」

「いえいえこちらこそ……」

でももう少し早く言って欲しかった……。と、咳きながらプロテューサーはその場を後にした。

長官執務室前の廊下

「……まあ可能ですけどね、一応」

「やっぱり不満かしら？」

「あはは～、砲術屋の本懐は対艦射撃です。つてやつですか？」「別に不満じゃないですか。けど、どうも……」

女三人寄ればかしましいとはよく言つが、話題がそれか。

前から歩いてきた雪歩、つつかん、そして天海参謀の会話を聞い

た素直な感想だ。余談だが、どつもあいつけ苦手だ。なんでだらうな。

「あ、プロデューサー！」

「お、おひ。どひしたんだ？ いんなりひど」

天海参謀に満面の笑みで声をかけられた。この笑顔がどつもなあ……。

「高木長官に、ですか？」

「ああ、作戦案が出来上がったんですね？」

「ああ……まあ、もう大筋では決まつたんだろ？、りっちゃん？」

参謀の半分が呼ばれているのだ。それに、もう開戦は避けられないと聞く。もう一月あるか……。

三人を見ると、皆、目を逸らす。それでもりっちゃんを見続けてみると、耐えきれなくなつたのかクチを割つた。

「……バレてました？」

「まあ、な。テストみたいなもんだろ？」

まあ、消耗を避けることを主眼においたから安心していくくれ。そいつ言つと、雪歩がちよつと逡巡してから口を開いた。

「その事なんですが……」

「ん、なんだ雪歩」

「無論、無駄な損害は避けるべきです。けど、海軍に奉公したその日から、皆、もしもの時の覚悟は出来ています。情に流され大義を見失うこと、無きよつお願い致します。それに……」

「……それに？」

「……それに、死ぬ」と云つても、お国のためになつますから

……雪歩の笑顔こゝれほど恐怖を感じたのはこれが初めてだつた。

「ブ、プロデューサー、早く行かれた方が良いですよー。」

「そ、そうですー。プロデューサーさん！ 高木長官がお呼びですよー。」

さあさあさあー と、二人にノックの暇もなく部屋に押し込まれてしまい、せりに話を聞き終わつたあとの高木長官の発言によつてこの事を深く考へること無かつた……。

「なるほど、それが君の案か。……宜しい。その線でつづりやん達と詰めてくれたまえ。

あ、あと、第3・第4航空戦隊の空母4隻の護衛と米アジア艦隊の搜索・撃滅も考慮してくれ。詳細はこれをみるよつこ

「……はい？」

だからこゝでかに分厚い茶封筒を差し出さなごでトセ……。

ちなみに、先に渡された密封命令は、高木長官に渡したら一瞬で消されてしましました。

長官曰く、「マジックだよ」だそつです。

つづく

## 第11話 演習1941（2）（後書き）

作者

「大変長らくお待たせしました」

あずや

「結婚者無さんオチでした」

律子

「流石にこんな序盤でキャラ殺してたら誰もこなくならぬでしょう」

亜美

「つつかやんメタイ」

作者

「お前ら……。ともかく、いい加減戦争に入らないと……」

伊織

「全くもう一 早くしなさいよね。  
じゃあ、意見や感想待ってるわね!」

## 第1-2話 ブリーフィング

昼過ぎ

艦隊司令部

大会議室

「　だ。今後とも、宜しく頼む」

プロデューサーが一礼して着席する。

間近に迫つた南方作戦行動計画の周知の為に、独立艦隊所属の分艦隊司令官、軍艦艦長、隊司令と艦隊参謀の面々が集まつていた。その冒頭で、改めてプロデューサーの紹介が行われていた。

「うむ。確かに第三分艦隊の諸君とは顔合わせが済んでいなかつたな？　では石川君、よろしく」

そう高木長官が指名すると、一分の隙も無く着こなした第一種軍装に、かなり癖のある黒髪を伸ばした女性が立ち上がつた。

「第三分艦隊司令長官の石川実よ」

さて、本来なら各顔の紹介と行きたいところだけど……と、横に座つてゐる面々　岡本まなみ、尾崎玲子ら　を見る。

「……まあ、知らない仲でもないわね？　我々第三  
「ちょっと待つて？」

端に座つていた、左右非対称のショートを髪留めでとめた中佐が何

故か疑問形でストップをかける。

艦隊は通商破壊を主任務としていてそれぞれ一隻ずつの

卷之三

「仮装巡洋艦戦隊と潜水隊で構成されていて、仮巡戦隊は私の直率。で、潜水隊の司令は、この水谷繪理伊号第一　潜水艦長が兼務しているわ」

なかば無理矢理絵理の紹介にもつていった。

「忘れたかと思った？」私は水谷絵理、よろしく

ペニリと頭をさげる。

ପ୍ରମାଣିତ କାନ୍ତିକାଳୀଙ୍କ ପରିବାରରେ

何かに思い当たつたようにPが絵理に問い合わせる。

「先日、演習で『陸奥』に雷撃がましたのは君か？ 見張りは潜望鏡すら発見できずに撃たれたみたいだがどこにいたんだ？」

第7話の最後を参照。  
左舷に魚雷4を撃たれている。

「うん、私の伊一<sup>ノイチ</sup>。あれは無音潜航中に聴音だけで射つたから」「ウチの繪理は聴音雷撃<sup>ノーラック・ショット</sup>の名人なのよ。射程に踏み込んだらまず生きて帰れないわね」

言葉少なに答える繪理に、その肩に手をおいて尾崎玲子「」とマダオ（まるでダメなおば…おれあさん）が被せる。

するのだが、そのあたりの話はまた今度。

「へえ、そいつは凄い」

「おほん。プロテューサー君、そろそろ本題に移つてくれるかね？」

場の雰囲気が雑談モードに移行しそうになつたのを察した高木長官が今回の本題、南方作戦に移るよう促す。

「はい。えー、本作戦の目的は、南方資源地帯の早急なる奪取による長期不敗体勢の構築にあり、特にA B C D 包囲陣によつ

「プロテューサー君プロテューサー君」

原稿を棒読みするプロテューサーを、頬杖をつきながら長官が遮る。

「なんでしょう？」

「長い、簡潔に。二行で」

室内が「またか……」といつ空氣に包まれる。新任は大体このタイミングでコレを喰らつ。

「…………え？」

思わず助けを求めるよつて出席者の顔を見るが、皆一様にのっこの口と皿を反らす。

「あー、ひとつ……

油が買えません

蘭印（オランダ領東インド）に奪いに行きます

そのために比島（米領フィリピン）と馬来半島（英領マレー）を占領します

……という所かな。これで理解できたか?」

異論がないのを確認して続ける。

「この方面を担当する南方部隊は、近藤信竹中将直率の南方部隊本隊、南雲忠一中将揮下の馬来部隊、高橋伊望中将揮下の比島部隊、小沢治三郎中将揮下の航空部隊、そして、高木順一朗中将指揮下の遊撃部隊で構成されている」

要するに戦艦と正規空母以外の主力艦・航空機の大半をつぎ込むと  
いうことだ。

「我々の属する遊撃部隊の任務は比島攻略の支援だ。第三、第四航空戦隊と共同してあたることになつていて。ここまでは良いか?」

「口言葉を切つて一同を見回すプロデューサー。」

「では、これより戦術的な行動についてへと移る。では、よろしく」

事前の打ち合わせ通りプロデューサーが着席し、代わつて美希が指揮棒をもつて地図の前に立つ。

「はいみんなちゅうもーく。軍令部からの通達によると、11月21日までに出港、30日に沖縄で油槽船1と合流、その後フィリピン東海上の指定海域で待機せよとのことなの」

日本からフィリピンまで引かれた線をなぞりながら  
言い、隣のフィリピン周辺の拡大地図に移る。

「で、開戦初日には台湾の台南と高雄の飛行場から飛び立った陸攻

が、フィリピンはルソン島のクラークフィールドとイバの飛行場に對して空襲を加えて敵航空機を地上で破壊する予定なの。

でも、爆弾抱えた陸攻は十分届くんだけど、護衛の零戦が届かない  
もうちょっと正確に言うと戦闘を行うにはギリギリしか燃料が持たないの。

そこで

「

振り返りつつ4隻の平べったい航空母艦のシルエットをべたりと張り付ける。

「 陸攻隊に呼応して小型空母『龍驤』『春日丸』『祥鳳』『龍鳳』の4隻から基地航空隊所属の零戦合計72機を発進させ、敵戦闘機をそーとーすることになった次第なの」

どこからか小さく声がした気がしたがスルーされた。

「 IFFの任務の一つはこの貧弱…脆弱な小型空母4と油槽船1を本來の搭載機、九六式艦戦／艦攻が戻つてくるまで護衛することなの。翌日以降の任務については律子、さんにお願いするの」

この後、律子から開戦二日目以降は米アジア艦隊の捕捉撃滅に専念すること、時期をみて陸軍と呼応してコレヒドール要塞に艦砲射撃を加えることについて説明があった。

そして、あざささんから航路の選定についてと、艦隊行動の秘匿のため、空母『陸奥』、打撃艦『多良』『由布』の無線上における呼出符号が期間限定で変更になることが知らされた。

最後に質疑応答があつて、高木長官によつて解散が宣言された。

「ではこれにて散会とする。宴会はこの後予定通り開催され、遅れず集合する事。プロデューサー君、敵前逃亡は厳罰に処するか

らな?」

皆が三々五々会議室から出でこくなが、書類を片付けていたPに美希が話し掛けた。「ねえプロデューサーさん。ちょっと良いかな?」

「ん? どうした美希、何かあつたか」

最後の封筒を鞄に放り込んで美希に向き直る。

「何か、つて程じゃないんだけど……ハゲちゃんの機動艦隊つて今どうしてるのかな、と思つて」

「ハゲとかいっぱいおるわ……ああ、塚原提督か。知り合いなのか?」

「うん、一昨年の秋、じろだつたかな、母艦だった『鳳翔』が練習空母になつて連合艦隊に取り上げられたから、大陸の漢口に進出することになつて」

漢口は長江と漢水が合流する地点に栄える商業都市で、日本海軍の一大飛行場が存在する。

「その時はまだミキが飛行隊長だつたんだけど、丁度漢口上空に来た時に国民党のHスベー爆撃機が奇襲してきて、ミキ達18機で味方が上がつて来るまで時間を稼いだの」

「そりやあ凄いな。でも、そんな話聞いたこと無いが」

そんな話があるなら有名になつても良いはずである。

「お偉いさんが『奇襲を許した上に女に助けられました』なんて言う訳ないの」

「……確かに」

「あと、デコちゃんの九六艦戦が降りた時に脚折って、指揮所前にいたハゲちゃんを轢きかけたってのもあって」

「おいおい、兵学校36期の双璧の片割れを殺しかけたらそりゃあ無かつたことにされるわ」

ちなみに、双璧のもう一人は南雲忠一提督である。

「で、機動艦隊がどこに行くか知ってる？」

「いや……一航艦にも同期はいるが最近会っていないしな。戦艦と一緒に内地で留守番じや」「ハワイね」な…舞さん！？

「出たのっ！？」

「何？ 人を人外みたいに。まあいいわ。塙原機動艦隊の初手は、開戦直後のハワイ真珠港奇襲攻撃よ」

自信たっぷりに言い切る人外。

「……一体何故、そういう結論に至つたので？」

決して根拠も無しに言い切る人物ではないことはプロデューサーもわかつてはいた。しかし、その根拠が時として常人には理解不能なため（勿論、破天荒な生活も大きいが）、能力の割に昇進が遅かつたりする。

「ふふ、すぐ言つたらつまんないじゃない。もうちょっと考えたら？ それじゃ、今夜は期待してるわよ？ ジゃあね」

言つだけ言つて手をひらひらさせつつ去つて行つた。

「つまんない、か。あの人らしいな」

「やつぱり舞はテンサイなの」

「だれがつまいこと言えと。」

まあ、1AFがどこをやろうが関係ない。俺たちは俺たちの任務をこなすだけだろ。じゃあ先に行ってるからな」

Pも書類鞄を小脇に抱えて足早に会議室を後にする。  
閑散とした会議室に美希一人だけが残っている。

「……あの呼出符号、多分空母『加賀』符号、参加する艦は空母ひしきもの6。てことはミキ達の本当の任務は……  
プロジェクト・サー、HFも全然無関係じゃないってミキは思つな……」

つづく

## 第12話 ブリーフィング（後書き）

真

一 突然ですか……」

修羅場トリオ

# 第一回 後書きメタメタ補足」」なう!!

美希

「このエーカーは、感想欄で質問が相次ぐことを危惧した作者が、聞かれる前に答えておこう。ラジオ形式で」と、いうことで企画したものなの」

雪步

「後で埋めておくのでどうか」容赦ください」

作者@アーツ外  
つ（暴力反対！）

雪步

「まずは、三人の方から同じような質問を頂いています」

真

「原じやない方の忠一さんより『艦隊人事が史実と違わないか正直有難いが』？」

“ハゲちゃん243”さんより『ワシが1AFのシチか。ワシの左腕はどうなつてる?』

“1AFはわしが育てた”さんより『なんで1AFの司令長官がわ

た、小沢治三郎提督じゃないんですか?』

です

雪歩

「皆さん隠す気皆無です。

答えを言つと、史実では39年秋に国民党軍の漢口奇襲爆撃で、塚原一四三提督は左腕を失つ重傷を負つて艦隊勤務が出来なくなつて、一航艦の長官が同期の南雲忠一提督になつたんです」

真

「IJの世界線では負傷しなかつたから、塚原提督が1AF長官になる 南雲提督が南遣艦隊長官に 小沢提督が史実で塚原提督のポストだつた十一航艦の長官になる……といつことなんだね」

美希

「次のお便是“ヒゲのショーフク”さんから『1AFはともかく、IFってなんぞな?』なの」

真

「IFってのはIdle Fleet、アイドル艦隊の略で、独立艦隊ともかける公式略称だよ。ちなみに1AFは第一航空艦隊のことね」

雪歩

「あ、あと、シチってのは司令長官の略称です。これに限らず海軍には略語・隱語が多くて、例えば『真ちゃんは女の子にMMK』とか……」

作者@ブース外

つ(ひでえ)

美希

「もててもてて困つてるのはホントなの。

次、“駆逐艦＆通報艦”さんより『特定のキャラの扱いが酷くないですか？』といふか何故、零戦が72機なんですか？』だつて

作者@ブース外

つ（そのような事実は全くありません）  
つ（平常通り肃々と対応しております）

雪歩

「だ、そりです」

美希

「機数は単に9機中隊×8つとのと、因空母が一度に出せせる機体と作戦のために用意できた機体が丁度72機だつただけだしね」

真

「最後に“飛龍は俺の妾”さん。『三十六計逃げるにしかず…』  
……ナーハル…」

雪歩

「ふふふ……逃がしませんよ？」

美希

「雪歩、すいぐ怖いの……」

雪歩

「作者さんの指示ですから」

作者@ブース外

つ（凄味のある笑顔で！）

美希

「あ、そろそろお別れの時間なの！」

作者@ブース外

つ（眞の可愛さはナチュラルにある。但し異論は認めん）

眞

「二人とも、そろそろ帰るよー。セーの！」

修羅場トリオ

「それでは、『』意見『』感想ネタ振り等お待ちしております（なの）！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8574p/>

独立アイドル艦隊奮闘記

2011年9月13日15時24分発行